

ラーバント遺文集の史料論的研究

藤 川 直 樹

凡例

BArch: Bundesarchiv

GStAPK Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz

ISG FFM: Institut für Stadtgeschichte Frankfurt am Main

SBB PK: Staatsbibliothek zu Berlin Preußischer Kulturbesitz

はじめに

一 本稿は、ドイツ連邦文書館ベルリン＝リヒターフェルデ支所（Bundesarchiv, Stelle Berlin-Lichterfelde）所蔵の「パウル・ラーバント遺文集」（Nachlass Paul Laband, BArch N 2161）（以下、『ラーバント遺文集』という。）に関する史料論的研究である。ドイツにおいては法学者の私文書が遺文集（Nachlass^{（1）}）として公的機関において保管されることが稀ではなく、学問史研究においても遺文集を利用することは自明視されている。『ラーバント遺文集』についても、既に講義案が翻刻され、^{（2）}それを利用したラーバント研究が現れており、^{（3）}筆者もまた『ラーバント

（1） 因みに、生前に寄贈された文書は Vorlass という。

（2） Paul Laband（bearbeitet von Bernd Schlüter）, Staatsrechtliche Vorlesungen. Vorlesungen zur Geschichte des Staatsdenkens, zur Staatstheorie und Verfassungsgeschichte und zum deutschen Staatsrecht des 19. Jahrhunderts, gehalten an der Kaiser-Wilhelms-Universität Straßburg 1872-1918, Berlin 2004.

遺文集』に含まれる史料を用いたことがある。⁽⁴⁾とりわけ、この遺文集には講義案だけではなく、ラーバントの法的鑑定意見書の原稿や関連資料が複数含まれており、これらは法学者ラーバントが同時代に生起する具体的な法的問題に対し、如何なる法学的論理をもって、また如何なる社会的態様において、実践的に関与したかを具象的に明らかにするための恰好の素材を提供するものである。もとより、この種の未公刊史料を扱うに際しては、当該史料の伝承過程や残存状況およびその性格について十分な史料批判が行われなければならないことはいうまでもない。それ故、『ラーバント遺文集』に含まれる史料それ自体について考証を加え、『ラーバント遺文集』及びその周辺について全体的展望を獲得しておくことは、今後のラーバント研究にとって不可欠の前提作業をなす。

もっとも、『ラーバント遺文集』の伝承過程を完全に復元することは極めて困難である。その要因は複合的である。ラーバントは独身で直系の子孫が存在せず、『ラーバント遺文集』を含む彼の遺産は傍系親族において相続されることとなったが、ラーバントとその親族のユダヤ出自によりNS期において迫害を受けることとなり、その過程で一部の史料は遺族によって焼却されたことが知られている。また、現在残存する『ラーバント遺文集』のうち「個人文書」を寄贈したのは妹ロザリー・エスバハ（旧姓ラーバント）（Rosalie Esbach, geb. Laband, 1842-1909）の孫であるが、本稿において論証するように、パウルの相続人は妹ル

(3) Bernd Schlüter, Reichswissenschaft. Staatsrechtslehre, Staatstheorie und Wissenschaftspolitik im Deutschen Kaiserreich am Beispiel der Reichsuniversität Straßburg, Frankfurt am Main 2004; 西村清貴「パウル・ラーバントの国制論——『国法講義』を中心として——」早稲田法学会誌58号（2008年）；西村清貴『近代ドイツの法と国制』（成文堂，2017年）第3章。

(4) 藤川直樹『王統と国家——近代ドイツ公法学における〈君侯法〉の展開』（弘文堂，2023年）290頁以下；藤川直樹「君主が懐妊の妃を遺して死亡するとき——「胎中天皇」・「胎中皇子」の比較近代法史——」神戸学院法学49巻2号（2021年）289頁。

イーゼ・ブルック（旧姓ラーバント）（Louise Bruck, geb. Laband, ?-1931）及びその子孫であったところ——著作物の著作権・出版権はルイーゼの2人の息子ヴィルヘルム・ブルック（Wilhelm Bruck, 1873-1942）とエルンスト・ブルック（Ernst Bruck, 1876-1942）が直接に受遺した——，ルイーゼの4人の子供は1942年に相次いで命を落としており、『ラーバント遺文集』の伝承について直接に知る者は絶えて久しかったはずである。現在，連邦文書館が『ラーバント遺文集目録』の「前書」において基礎としている情報源はブルックから遺文集を譲り受けたフリードリヒ＝カール・エスバハ（Friedrich-Carl Esbach, 1870-1945；ロザリーの息子，パウル・ラーバントの甥）の家政婦アンナ・ポピエラルスキ（Anna Popielarski）の書翰による証言及びフリードリヒ＝カール・エスバハの甥ハインリヒ・ゲオルク・メルクル（Heinrich Georg Merkel）のメモ——いずれも『ラーバント遺文集』に収録されている——に過ぎず，間接的な伝聞情報に止まる憾みがあるのみならず，現在の『ラーバント遺文集』の大きな部分を構成する「法的鑑定意見書」については一切の情報を伝えていない。そして「法的鑑定意見書」の伝承情報の起点はソヴェト赤軍による接収であり，それ以上遡って伝承史を跡付けることは殆ど不可能事に属するように思われる。

しかしながら，なによりも基準とされるべき連邦文書館作成『ラーバント遺文集目録』「前書」の記述を大幅に補充・修正する史料の所見が少なからず存在している。伝承史の完全な復元は不可能であるとしても，可能な限りでの復元はやはり求められるはずである。また，『ラーバント遺文集』は講義案の他は十分に利活用されていないが，他の部分もまたラーバントに関する学問史的伝記研究のために有益な情報を提供している。そこで本稿では，まず『ラーバント遺文集』の伝承を可能な限り

（5） 講義案以外の部分を利用しているものとして前註記載の拙著・拙稿の他，Reinhard Mußnug, Paul Laband (1838-1918), in: Peter Häberle u.a. (Hg.), Staatsrechtslehrer des 20. Jahrhunderts, Berlin 2015, S. 3 ff. がある。

復元し、本来の遺文集の全体像の再構成を試みる（第1章）。次いで、遺文集に収録されている史料の性格を考証する（第2章）。但し、実際の検討作業はこの両者の往復に依らざるを得ないことを予めお断りする。

二 本稿で検討する『ラーバント遺文集』は全22巻（Band）に整理されており、連邦文書館所蔵の『ラーバント遺文集目録』に従ってタイトルを示すと以下の表ようになる（順序は変則的であるが『ラーバント遺文集目録』に従う）。現在、『ラーバント遺文集』は大きく「個人文書（Persönliche Unterlagen）」（第18巻～第22巻）及び「法的鑑定意見書（Rechtsgutachten）」（第1巻～第17巻）に分類されている。「法的鑑定意見書」には講義案も含まれているだけではなく、本稿で明らかにするように、本来の『ラーバント遺文集』には未定稿の論文原稿や講演原稿も存在したと考えられ、遺文集の当初の整理時にはそうした表題で分類されていたわけでもないと考えられるが、以下では『ラーバント遺文集目録』に従って第18巻から第22巻までを「個人文書」、第1巻から第17巻までを「法的鑑定意見書」と呼称する。

表 『ラーバント遺文集』目録
（ドイツ連邦文書館所蔵『ラーバント遺文集目録』より抜粋）

1. Persönliche Unterlagen	
18	Dokumente und andere Materialien zum Lebenslauf, Bd. 1: Lebenslauf, Ordensverzeichnis und Nachlaßbeschreibung durch Heinrich G. Merkel; Reproduktion eines Fotos von Labands Büste; Lebenserinnerungen von Paul Laband
19	Dokumente und andere Materialien zum Lebenslauf, Bd. 2: Matrikel, Taufschein usw.
20	Persönliche Briefe an die Eltern, Bd. 1: 1856-1857
21	Persönliche Briefe an die Eltern, Bd. 2: 1861-1864, 1893
22	Dokumente und Artikel zum 50. Doktorjubiläum sowie zum Tode Labands
2. Rechtsgutachten	
4	Staatsrechtliche Stellung des Hauses Schleswig-Holstein 1873, 1882-1893

ラーバント遺文集の史料論的研究

9	Erbfolgeordnung im Fürstlichen und Gräflichen Fuggerschen Hause 1877-1878, 1887, 1889-1890
7	Erbschaftssteuer des Fürsten Max Egon zu Fürstenberg, Donaueschingen 1897-1898
5	Thronerbfolge des Großherzogtums Luxemburg 1900, 1906-1909
10	Erbfolge der Waldburg-Zell-Wurzach'schen Stammgüter 1906-1910
6	Erbfolge des Fürstenhauses Salm
11	Rechtliche Stellung des badischen Stammgutes 1905, 1911
1	Das Staatsrecht des Deutschen Reiches (Manuskripte zu Vorlesungen) um 1914
8	Vermögenshinterlassungen, 1888, 1890, 1902
15	Rheinische Hypothekenbank AG, 1890, 1892-1893
14	Verstaatlichung der Hessischen Ludwigsbahn 1891-1894
13	Pensionsanstalt der vereidigten Wechselmakler zu Frankfurt/Main 1896-1897
12	Rechtliches Verhältnis der öffentlichen milden Stiftungen zur Stadt Frankfurt/Main 1899-1900
2	Deutsche Flotte 1897-1898 enthält Gesetzesentwurf
3	Nauticus: Neue Beiträge zur Flottenfrage. Berlin 1898
16	Straßenbahn in Straßburg. Rechtsgutachten im Auftrag des Bürgermeisters von Straßburg 1910-1911
17	Zahlung von zwangsweise erhobenen Kasernierungskostenbeiträge in den Garnisonstädten Elsaß-Lothringen

第 1 章 『ラーバント遺文集』の伝承について

第 1 節 連邦文書館作成『ラーバント遺文集目録』「前書」の説明

『ラーバント遺文集』の伝承を伝える史資料としては、まず連邦文書館作成の『ラーバント遺文集目録 (Findbuch)』に附せられた「前書 (Vorbemerkung)」(1998年8月, Dr. Ritter による作成) が参照される必要がある。

資料 連邦文書館作成『ラーバント遺文集目録』「前書」

(Bundesarchiv, Findbuch, Nachlaß Paul Laband (1838-1918), S. 3,
Bestand Bundesarchiv Stelle Berlin-Lichterfelde)

前書

パウル・ラーバント遺文集の伝承史は特別な仕方では20世紀ドイツの政治的發展によって特徴づけられている。1933年段階では少なくとも遺文集の個人的資料群についてはラーバントの甥である法学博士フリードリヒ・エスバハ（ベルリン）の所有のもとにまだ完全な状態で存在したと見られるが、彼はしかし当時において——彼の家政婦であったアンナ・ポピエラルスキ氏の後の情報提供によれば——これらの文書類の包括的かつ重要な部分、特に後半生における書翰を、報復措置を懼れて——ラーバントはユダヤ出自であった——焼却してしまった。残余物は最終的に1982年にその甥であるハインリヒ・G・メルクル（『ニュルンベルガー・ナハリヒテン』の編集者）によって連邦文書館コブレンツ本館に寄贈され、同所において M・レーナルツ氏によって整理され、目録が作成された。この文書群は当初、所蔵番号 NL 319, 後に N 1319 を与えられた。1997年にこれらの部分的伝承物がベルリン＝リヒターフェルデに移管され、従来の巻番号 1～5 は同じ順序で 18～22 に変更された。

ヨリ分量の多い遺文集の第二の部分、即ち法的鑑定意見書及びその関連資料群（1～17巻）の「前史」は明らかにされていない。確実であるのは、それらが1945年に赤軍進駐地域に存在し、ソヴェト連邦に持ち去られ、1958年にまずはドレースデンのザクセン・ラント図書館に移管された。次いでこれらは同地からザクセン・ラント中央文書館、ブランデンブルク・ラント中央文書館を経て、最終的にポツダム＝ドイツ中央文書館に移管され、同地において請求記号 90 La 2 を与えられ、1988年に D. ハルトマン氏によって目録が作成された。以下の目録はこれらの二つの伝承部分を統合したものである。ベルリン、1998年8月、博士リッター

„Vorbemerkung

Die Überlieferungsgeschichte des Nachlasses von Paul Laband ist in besonderer Weise geprägt von der politischen Entwicklung Deutschlands im 20. Jahrhundert. 1933 scheint sich zumindest der persönliche Teil des Nachlasses noch vollständig im Besitz eines Neffen Labands, von Dr. jur. Friedrich Esbach in Berlin befunden zu haben, der aber damals nach späterer Auskunft seiner Wirtschafterin, Frau Anna Popielarski, den umfangreicheren und bedeutenderen Teil dieser Papiere, insbesondere die Korrespondenzen aus der späteren Lebenszeit aus Furcht vor Repressalien – Laband war jüdischer Herkunft – verbrannte. Der verbliebene Rest wurde schließlich im Jahre 1982 von dessen Neffen, Heinrich G. Merkel, dem Herausgeber der

Nürnberger Nachrichten, dem Bundesarchiv Koblenz übereignet und dort kurz darauf von Frau M. Loenartz geordnet und verzeichnet; er erhielt zunächst die Bestandsnummer NL 319, später N 1319. 1997 wurde diese Teilüberlieferung nach Berlin-Lichterfelde überführt, die bisherigen Bandnummern 1-5 wurden in gleicher Reihenfolge in 18 – 22 umsigniert.

Die „Vorgeschichte“ des umfangreicheren zweiten Nachlaßteils, der Rechtsgutachten und begleitende Unterlagen dazu umfaßt (Bände 1 - 17), ist ungeklärt. Fest steht, daß er sich 1945 im Einmarschbereich der Roten Armee befand, in die Sowjetunion verbracht und von dort 1958 zunächst der Sächsischen Landesbibliothek in Dresden übergeben wurde. Von dort gelangte er über das Sächsische Landeshauptarchiv und das Brandenburgische Landeshauptarchiv schließlich in das Deutsche Zentralarchiv Potsdam, wo er die Signatur 90 La 2 erhielt und 1988 von Frau D. Hartmann verzeichnet wurde. Das nachstehende Findbuch faßt nun beide Überlieferungsteile zusammen.

Berlin, im August 1998

(Dr. Ritter)“

この「前書」によれば、『遺文書』のうち「個人文書」(第18～第22巻)は1982年にラーバントの大甥ハインリヒ・ゲオルク・メルクル (Heinrich Georg Merkel) によって連邦文書館コブレンツ本館に寄贈されたものであり (当時の所蔵番号は NL 319, 後に N 1319), 対して「法的鑑定意見書」(第1～第17巻)は前史不明ながら赤軍進軍地域に存在したと考えられ, 赤軍によって接収されてソヴェト連邦に持ち去られた後, ザクセン・ラント図書館 (Sächsische Landesbibliothek in Dresden), ザクセン・ラント中央文書館 (Sächsisches Landeshauptarchiv), ブランデンブルク・ラント中央文書館 (Brandenburgisches Landeshauptarchiv) を経てポツダム＝ドイツ中央文書館 (Deutsches Zentralarchiv Potsdam) に移管されたものである (ポツダムでの請求番号は 90 La 2)。⁽⁶⁾

(6) 「前書」が古い請求記号を記載しているのは, 「法的鑑定意見書」の簿冊整理がポツダム・ドイツ中央文書館時代の簿冊整理を継承しており, 簿冊表紙に “Eigentum des Zentralen Staatsarchivs Potsdam” の判が押され, “90 La 2 Laband, Paul” と書き込まれているからであろう。

そして1997年に「個人文書」が連邦文書館ベルリン支所に移管され、⁽⁷⁾整理番号も従来の第1～第5巻から第18～第22巻に変更された。こうしてこの2つの史料群が連邦文書館ベルリン支所に所蔵されるに至っている。「個人文書」については寄贈後の経緯について、「法的鑑定意見書」についてはザクセン・ラント図書館への移管後の経緯について、それぞれ『ラーバント遺文集目録』「前書」の記載に疑義を挟む余地はない。

他方、『ラーバント遺文集目録』「前書」は「個人文書」の側の寄贈前までの伝承について、「1933年時点では少なくとも遺文書の個人文書はラーバントの甥である法学博士フリードリヒ＝カール・エスバハ（ベルリン）のもとに完全なかたちで存在したと考えられるが、家政婦であったアンナ・ポピエラルスキによる後の情報提供によれば、これら文書類のより包括的で重要性のある部分、特に後半生における書翰は、報復措置を懼れて…焼却された」と説明している。かような「前書」の伝承史説明は、メルクル及びポピエラルスキの情報提供に依拠していると考えられ、従って「個人文書」の伝承については史料それ自体に痕跡の残る情報を除けば、伝聞証拠しか残っていないことになる。問題は、この「前書」の説明と『ラーバント遺文集』に残る若干の伝承史情報との間には、既に齟齬が存在することである。

第2節 『ラーバント遺文集』収録史料に含まれる伝承史情報——メルクル備忘とポピエラルスキ書翰

現在の『ラーバント遺文集』には、厳密にはラーバントの遺産（Nachlass）ではないと考えられる史料が多数含まれている。それは、①『ラー

(7) この事情から、『ラーバント遺文集目録』が『ラーバント遺文集』第18巻～第22巻を前置しているのは、これらがもともと連邦文書館で保管されていた遺文集であって、然るに統合時に——おそらく番号の振り直しの少ない方の番号を変える趣旨で——これらの巻が後置されたからであろうと推測される。

バント遺文集』の伝承過程において遺文集の整理に関する備忘のために作成されたと考えられる資料と、②『ラーバント遺文集』を所有していた親族が遺文集とは別に所有していたラーバント関係資料が、伝承過程において『ラーバント遺文集』に統合されるに至ったものの二つの範疇に分類できる。ここでは前者の範疇の史料が重要である。

— 一つ目は『ラーバント遺文集』『個人文書』の最終所有者であるメルクルによって作成された以下の備忘である。これによれば1945年5月に逝去したF=C・エスバハ所蔵の『ラーバント遺文集』『個人文書』は——ベルリン市街戦と戦後の混乱によるものであろうが——元家政婦が預かっており、十年以上経過した後に、エスバハの甥のメルクルに引き渡された。この伝承史情報は『ラーバント遺文集目録』『前書』には反映されていない。メルクルは遺文集の整理を行っているが、特にラーバントの両親宛書翰について元家政婦ポピエラルスキに照会したものと推測され、次に見る書翰はその返答ではないかと推測される（但し、ポピエラルスキが引渡の際に自発的に書翰史料について書面で説明した可能性は排除されない）。

史料 1956年7月27日, H・G・メルクルの備忘
(BArch N 2161/18, ohne Blnr.)

我が伯父フリードリヒ・カール・エスバハ（ベルリン、1945年5月逝去）
相続財産から、ポピエラルスキ氏（ベルリン、元家政婦）より1956年7
月25日に取得。ハインリヒ・G・メルクル ...1956年7月27日作成
„Erhalten aus der Erbschaft meines Onkel Friedrich Carl Esbach, Berlin
verst. Mai 1945 von Frau Popielarski, Berlin ehem. Haushälterin am 25. 7.
1956 Heinrich G. Merkel [...] 27/7. 56“

二 『ラーバント遺文集目録』『前書』にある家政婦アンナ・ポピエラルスキ（Anna Popielarski）の情報提供とは、恐らく『ラーバント遺文集』第19巻に収録されている1956年発信（月日不明）のH・G・メルクル宛書翰の抜粋（タイプ史料）を指すものと思われる。これはメルクルの照会に応じて（または自発的に）発信された書翰がメルクルによ

て抜粋されたものと推測される。但し、この史料を卒然と読んでも、発信者と名宛人とが謂わずとも共有していたであろう親族関係と家族史的前提を抜きにして理解することはできないから、以下、適宜補足しながら訳出する。

史料 1956年、ポピエラルスキ発信 H・G・メルクル宛書翰・抜粋
(BArch N 2161/19, Bl. 134)

その書類群は「ヴィルヘルム・」ブルック博士が送って来られたものと確信します。ブルック博士は戦争が始まった頃、パウル伯父さんがプレスラウにいる彼の両親宛に若い学生として送った全ての手紙を含む小包を送って来られました。貴方「ハインリヒ・G・メルクル」の伯父さん「フリードリヒ＝カール・エスバハ」がブルック博士にそれを頼んだからです。彼は、彼の従兄弟「ブルック」がそれ以上に良いものを送って呉れなかったことも残念がっていました。その手紙類は何か意味のあるものを含んでおらず、伯父さんは『彼「パウル・ラーバント」が両親宛に書いたものなど誰の興味を惹くだろうか』というお考えで、危機的な状況のなかで我々はそれを焼却しました。ブルック博士は個人的にも一度ヴィルマースドルフの住居に来たことがあります、何も持ってきていませんでした。彼が来たのはベルリンの女子修道院で亡くなった彼の老母「ルイーゼ・ブルック」の遺産整理のためでした。彼はその後、息子のヴォルフガングに会っていました。ヴォルフガングはメッセル氏の一人娘と結婚し、メッセル氏の希望でブルック＝メッセルという名前も帯びていました。若い夫妻はアメリカに移住しました。

アッシュ衛生顧問夫人「ブルックの次姉マリー・アッシュ（旧姓ブルック）」と、旧姓ラーバントの妻「ブルックの長姉マルガレーテ・ヘルマン（旧姓ブルック）を指すものと思われる」をもつ区裁判所判事ヘルマン氏「原文には Herman とあるが Herrmann であろう」は、以前はマクデブルク区裁判所にいましたが、既に年金生活に入っていました。彼らはアッシュ夫人のいるベルリンに来て、アウクスブルク通りの彼女のもとに住み、後には小さい二部屋住居にしなければなりません。彼らもまたテレジエンシュタット「強制収容所」に行きました。貴方の伯父さんはハンブルクのブルック博士夫人、つまりエルンスト・ブルック未亡人に手紙を書いていました。彼女はキリスト教徒で、ルートヴィヒという名前の

- (8) 『ラーバント遺文集』第18巻・第19巻には直接ラーバントに由来しない史料、すなわち大甥ハインリヒ・G・メルクルによって作成された遺文集整理のためのメモ類も綴じられている。

息子がいました。彼女に対しても年金を打ち切ろうとする動きがありましたが、難を逃れました。彼女もキールでの葬儀 [娘の強制収容所送りの決定を受けて1942年に心中自決したヴィルヘルム・ブルック一家の葬儀と思われる] に参列し、後に貴方の伯父さんとベルリーンで会って何か伝えたのだと思います。それから医者の子のルートヴィヒ・ラーバント博士が当地のヴィルマースドルフにおられ、彼は診療所を売り払って息子を頼ってオーストラリアに行かれました。これはアルベルト・ラーバント [パウル・ラーバントの弟] の息子で、レジーナ・モッセ夫人は彼の姉妹です。当地シュマルグェンドルフには今でもモッセ財団があります。ですからモッセ夫人はパウル・ラーバント博士の姪で、貴方の母君とエスバハ氏の従姉妹になります。彼女に子供はありませんでした [これは事実誤認である]。お分かりの通り、私はこの家族関係についてはかなりよく知っているわけですね！

„[134] Auszug aus einem Brief von Frau Anna Popielarski, Berlin-Friedenau, Görrestrasse 9/III.

----- 1956

Ich glaube bestimmt, dass die Schriftstücke Herr Dr. Bruck geschickt hat. Er hat zu Anfang des Krieges ein Paket geschickt mit allen Briefen von Onkel Paul an seine Eltern in Breslau und als junger Student, weil Ihr Onkel ihn darum gebeten hat. Er war auch enttäuscht darüber, daß sein Vetter ihm nichts Besseres geschickt hat. Die Briefe enthielten nichts von Bedeutung und der Onkel meinte „wen interessiert das, das er an seine Eltern schrieb“ und in der kritischen Zeit haben wir dieselben verbrannt. Herr Dr. Bruck war auch persönlich in der Wohnung in Wilmersdorf einmal, aber da hat er nichts mitgebracht; er kam nur, um den Nachlaß seiner alten Mutter zu ordnen, die in Berlin in einem Damenstift verstorben war. Er traf sich anschließend mit seinem Sohn Wolfgang, der die einzige Tochter geb. Messel heiratete und auch den Namen Bruck-Messel führt auf Wunsch des Herrn Messel. Das junge Paar ist nach Amerika ausgewandert.

Frau Sanitätsrat Asch und Herr Amtsgerichtsrat Herman mit Frau geb. Laband, früher am Amtsgericht Magdeburg, wurde pensioniert. Sie kamen nach Berlin zu Frau Asch, wohnten bei ihr in der Augsburger Strasse und mussten später in eine kleine Zweizimmerwohnung. Sie sind auch nach Theresienstadt gekommen. Ihr Onkel hatte an Frau Dr. Bruck, Hamburg, geschrieben, die Witwe von Ernst Bruck. Sie war Christin und hat einen Sohn Ludwig. Man sollte ihr auch die Pension streichen, aber sie ist dann so davongekommen. Ich glaube, sie war auch zur Beerdigung in Kiel und hatte sich mit Ihrem Onkel später in Berlin getroffen und ihm einiges er-

zählt. Dann war noch ein Arzt Dr. Ludwig Laband, hier in Wilmersdorf, der hatte seine Praxis verkauft und ist zu seinem Sohn nach Australien gereist. Dies war ein Sohn von Albert Laband und Frau Regina Mosse war seine Schwester. [134r.] Hier in Schmargendorf ist noch die Mosse-Stiftung. Frau Mosse war also die Nichte von Dr. Paul Laband und Cousine Ihrer Frau Mutter und Herrn Esbachs. Sie hatte keine Kinder. Wie Sie sehen, bin ich in diesen Familienangelegenheiten ziemlich gut orientiert!“

この書翰によれば「戦争が始まった頃 (zu Anfang des Krieges)」に「ブルック博士」からエスバハに遺文書が渡ったことになるから、『ラーバント遺文集目録』「前書」が1933年時点でエスバハのもとで完全に保管されていたと推測していることと齟齬する。また、書翰類の焼却に関して『ラーバント遺文集目録』「前書」はラーバントの書翰全般を指しているかのように記述しているが、ポピエラルスキ書翰は専ら両親宛の書翰（『ラーバント遺文集』第20巻・第21巻）の一部を焼却したと述べているに過ぎない。

第3節 ラーバントの親族関係

ところで、ラーバントの部分遺文集が親族間を転々としていた以上、ラーバントの親族関係についてまず整理しておく必要がある。但し、ラーバントの親族関係は不明な点が多く、ドイツの代表的な人名辞典であるNDBにおいても兄弟の情報は出てこない⁽⁹⁾。これらの点はラーバントの『回顧録』（1918年）や周辺史料によって補充する必要がある。なお、上記のポピエラルスキ書翰も必ずしも全面的に信頼することはできない。

ラーバントの親族関係を、明らかにできる範囲で図示すると、概ね以下の通りである。

(9) Manfred Friedrich, „Laband. Paul“, in: NDB 13 (1982), S. 382.

Ludwig Laband ⁽¹⁰⁾ (-1872) ♂ Jeanette, geb. Schnitzler ⁽¹¹⁾ (?-?) Paul Laband (1838-1918) Albert Laband (1840/41-1909) ⁽¹²⁾ ♂ Cornelia, geb. Scherbel ⁽¹³⁾ (?-?) Regina Mosse, geb. Laband (1878-1938) ⁽¹⁴⁾ ♂ Max Mosse (1873- ⁽¹⁵⁾ 1936)

- (10) Friedrich (Fn. 9), S. 382, Mußgnug, (Fn. 5), S. 4. —没年については Laband, Lebenserinnerungen, S. 71.
- (11) Friedrich (Fn. 9), S. 382 は母の名を Johanna とするが, ラーバントの洗礼証は Jeanette とする (BArch N 2161/19, Bl. 4)。Siehe auch Mußgnug, (Fn. 5), S. 4.
- (12) Vossische Zeitung に死亡記事があり, 享年69歳であることが分かる (Todesanzeige in: Vossische Zeitung, Morgenausgabe am 17. Februar 1909, S. 10: „Statt besonderer Meldung. Am Sonnabend, den 13. Februar, entschlief sanft mein geliebter Mann, unser teurer Vater, Großvater, Bruder, Schwiegervater, Albert Laband, im 69. Lebensjahre. Berlin W. 30., den 17. Februar 1909. Im Namen der Hinterbliebenen Cornelia Laband, geb. Scherbel. Die Beerdigung hat auf Wunsch des Vorstorbenen [sic!] in aller Stille stattgefunden. Condolenzbesuche dankend verboten.“)。なお, ラーバントは1909年2月16日付のジーベック宛書翰において, 「私は二重に喪に服しています。3週間前にプレスラウの妹を, 3日前にベルリンにいる唯一の弟を, 死によって失いました。」と伝えている (Brief Paul Labands an Paul Siebeck vom 16. Februar 1909: „[...] Ich bin in doppelte Trauer versetzt, indem ich vor 3 Wochen meine Schwester in Breslau und vor 3 Tagen meinen einzigen Bruder in Berlin durch den Tod verloren habe. [...]“, SBB PK, Nachl. 488, A 0266, Mappe 13, Bl. 122)。
- (13) Laband, Lebenserinnerungen, S. 109 は “Cornelie“ と表記しているが, ここでは前註引用の新聞記事および Vossische Zeitung, Morgenausgabe am 11. Juli 1899, S. 11 掲載の婚約広告に従う (“Die Verlobung ihrer Tochter Regina mit Herrn Dr. med. Max Mosse beehren sich ergebenst anzuzeigen Albert Laband und Frau, Cornelia, geb. Scherbel. Berlin, im Juli 1899, W. Kurfürstenstr. 53“)。
- (14) Stammbaum Mosse, in: Landesarchiv Berlin, E Rep. 061-16-01; <https://www.oberstdorf-lexikon.de/persoenlichkeiten/literaten/noack-mosse-eva.html> (Erstellt von Manfred Schäfer, Stand 19. Juni 2023)。

Käthe Olschki (1900-1989)⁽¹⁶⁾

Eva Noack (1902-1990)⁽¹⁷⁾

Hilde Danzinger (1904-1998)⁽¹⁸⁾

Ludwig Laband (?-?)⁽¹⁹⁾

Rosalie Esbach, geb. Laband (1842-1909)⁽²⁰⁾ ♂ Friedrich Esbach (1830-1902)⁽²¹⁾

Friedrich-Carl Esbach (1870-1945)⁽²²⁾

Gertrud Merkel, geb. Esbach (1871-1963)⁽²³⁾ ♂ Georg Franz Merkel (1861-1938)⁽²⁴⁾

Heinrich Georg Merkel (1900-1985)⁽²⁵⁾

(15) Ebd.

(16) Ebd.

(17) Ebd.

(18) Ebd.

(19) Auszug aus dem Brief Anna Polielarskis an Heinrich Georg Merkel im Jahre 1956, BArch N 2161/19, Bl. 134. —第二次世界大戦後にオーストリア在住の Dr. Ludwig Laband なる人物が NS 期に剥奪された財産返還請求を行っている史料が存在するが (Landesarchiv Berlin, B Rep. 025-08 Nr. 1150/61; ebd. 1151/61; ebd. 4748/55; ebd. 5847/55; ebd. 5848/57), この Ludwig Laband との同一性を確実に示す史料は含まれていない。——なお, ルートヴィヒ及びコルネリア夫妻の一家にはラーバントの肖像画が伝承されていたはずである。Vgl. Laband, Lebenserinnerungen, S. 110.

(20) Volker Schulze, Art. Heinrich Georg Merkel, in: NDB 17 (1994), S. 151 f.

(21) Volker Schulze (Fn. 20), S. 151 f.

(22) Notiz von Heinrich Georg Merkel, BArch N 2161/18, ohne Blnr.; Bruno Volger, Sachsens Gelehrte, Künstler und Schriftsteller in Wort und Bild, Leipzig 1908, S. 218 f.

(23) Volker Schulze (Fn. 20), S. 151 f. —ラーバントは, ロザリーに譲ったラーバントの肖像画がその死後にゲルトルートの所有するところになっているのではないかと推測している。Vgl. Laband, Lebenserinnerungen, S. 111.

(24) Volker Schulze (Fn. 20), S. 151 f.

(25) Volker Schulze (Fn. 20), S. 151 f.

ラーバント遺文集の史料論的研究

Louise Bruck, geb. Laband (?-1931)⁽²⁶⁾ ♂ Ignaz Bruck (1841-1917)⁽²⁷⁾
 Margarete Herrmann, geb. Bruck (1871-1942)⁽²⁸⁾ ♂ Alfred Michel
 Herrmann (?-1942)⁽²⁹⁾
 Marie Asch, geb. Bruck (1872-1942)⁽³⁰⁾ ♂ Julius Asch (1856-1932)⁽³¹⁾
 Wilhelm Bruck (1873-1942)⁽³²⁾ ♂ Elisabeth Margarete, geb. Hennoch
 (?-1942)⁽³³⁾
 Wolfgang Bruck-Messel (1898-?)⁽³⁴⁾ ♂ Frau Messel (?-?)
 Vera Bruck (1901-1942)⁽³⁵⁾
 Ernst Bruck (1876-1942)⁽³⁶⁾

但し、『回顧録』その他の史料によって裏付けることはできないものの、『ラーバント遺文集』第20巻・第21巻に収録されているラーバントの両親宛書翰を辿れば、上記弟妹3人のほかに（おそらく年の離れた）弟妹として“Lutz“（または“Luz“）と呼ばれる弟と Liesel という名前⁽³⁷⁾

(26) „Wir erinnern an Marie Valesca Asch“ (https://www.magdeburg.de/PDF/Asch_M_Valesca.PDF?ObjSvrID=37&ObjID=54048&ObjLa=1&Ext=PDF&WTR=1&_ts=1660648094; abgerufen vom 29. Juni 2025)

(27) Ebd.

(28) Ebd.

(29) Ebd.

(30) Ebd.

(31) Ebd.

(32) Friedhelm Röttger, Erinnerung an den Oberlandesgerichtsrat Dr. Wilhelm Bruck, in : Anwalt ohne Recht, Glückstadt 2014, S. 1 f. „Landesbeauftragter für politische Bildung veröffentlicht App „Stolpersteine SH““ (Pressmitteilung des Schleswig-Holsteinischen Landtages vom 6. November 2023, <https://www.landtag.ltsh.de/pressticker/2023-11-06-10-05-36-3bba>; abgerufen vom 29. Juni 2025).

(33) Ebd.

(34) Ebd.

(35) Ebd.

(36) Wolfgang Poppelbaum, Bruck, Ernst, in: Franklin Kopitzsch/Dirk Brietzke (Hg.), Hamburgische Biografie II, Hamburg 2003, S. 70 f.

(38) の妹がおり、いずれにせよ姉妹は少なくとも3人いたようである。⁽³⁹⁾ しか
し、これらの人物の消息は未だ掴めていない。⁽⁴⁰⁾

(37) „[...] Geliebter Luz! Zu deinem Geburtstag bringe ich die nachträglich meine herzlichen Glückwünsche dar u. wünsche, daß du ein frommes, fleißiges u. braves Kind wirst, daß seinen Eltern Freude macht. Ich hätte dir gern etwas geschickt, es ist aber mit solchen Schwierigkeiten verbunden, daß ich es mir für ein andres Mal vorbehalte. Schreibe mir, wie du deinen Geburtstag gefeiert hast u. was du geschenkt erhalten hast. Ich wünsche dir im nächsten Jahr Gesundheit u. Wohlergehn u. den Segen des Himmels. Grüße unsre Geschwister herzlich von deinem dich liebenden Bruder Paul.“ (Brief Paul Labands an seine Eltern vom 29. Januar 1856, BArch N 2161/20, Bl. 5). —Luz と Albert は同一人物ではない。Vgl. Brief Paul Labands an seine Eltern vom 20. Februar 1856, BArch N 2161/20, Bl. 14r: „[...] Grüße meine lieben Geschwister, ich laße ihnen für ihre Briefe herzl. danken. Daß Albert seinen Geburtstag froh gefeiert hat, freut mich sehr. Der Rosalie laße ich zur bevorstehenden Versetzung viel Glück wünschen, ebenso dem kleinen Lutz. [...]“

(38) „Mein geliebtes Lieschen! (Lieché!) [...] ... schreiben deinem dich liebenden Bruder Paul“ (Brief Paul Labands an seine Eltern vom 16. Oktober 1861, BArch N 2161/21, Bl. 5r). —この“Lieschen“は他の書翰において“Liese“または“Liesel“と呼ばれている人物と同一と思われる(BArch N 2161/21, Bl. 21, 131, 136r)。—なお Rosalie や Louise という名前の従姉妹も存在するようであるので、注意を要する。

(39) Brief Paul Labands an seine Eltern vom 5. Januar 1863, BArch N 2161/21, Bl. 27: „[...] Bedürniß meiner 3 Schwestern [...]“. —その他, Marie という人物が書翰に見えるが、姉妹か否かは確実には判別できない。Vgl. Brief Paul Labands an seine Eltern vom 16. Oktober 1861, BArch N 2161/21, Bl. 4r: „Albert u. Marie danke ich, ebenso wie Rosalie, für ihre Briefe, wiewol mir Marie eigentlich mitgetheilt hat, daß sie mir – natürlich „nicht aus Federfaulheit, sondern aus Liebe“ – nicht schreibt“.

(40) ラーバントが Albert の死亡時に「唯一の弟」と呼んでいることから(註12に引用した書翰を参照のこと), Lutz は Albert よりも先に死亡していたはずである。

第4節 ラーバント自筆遺言抜粋

一 ポピエラルスキ書翰は「個人文書」(少なくとも両親宛書翰)が「ブルック博士」からエスバハに涉ったことを教えている。ここに見える「ブルック博士」とは、結論から言えば、ラーバントの甥(妹ルイーゼの息子)で遺言執行人であったヴィルヘルム・ブルック(Wilhelm Bruck, 1873-1942)であると考えられる。W・ブルックが遺言執行人であったことは、『ラーバント遺文集』に収録されている死後出版の『回顧録』(1918年)の冊子体に貼付されている謹呈カードに“Ueberreicht von Oberlandesgerichtsrat Dr. Wilhelm Bruck in Kiel, Niemannsweg 129 als Testamentsvollstrecker des Wirklichen Geheimen Rats Prof. Dr. Paul Laband⁽⁴¹⁾”と記載されていることから窺える。

このW・ブルックとモーア・ジーベック社との通信がベルリীন州立図書館所蔵の『出版社文書(Verlagsarchiv)』に収められているが、筆者の調査によって、ここから『ラーバント遺文集』の伝承過程を解明する上で重要な史料が発見された。それはシュトラースブルク区裁判所からパウル・ジーベックに送付されたラーバントの自筆遺言の抜粋である(タイプ史料)⁽⁴²⁾。これは遺言執行人であり、また著作権・出版権の共同受遺者でもあったW・ブルックが、ラーバントの『ドイツ帝国国法(Staatsrecht des Deutschen Reichs)』(『大國法』)および『帝国国法(Reichsstaatsrecht)』(『小國法』)の補訂版の出版について出版社と協

(41) BArch N 2161/18, Bl. 121. —なお Paul Laband, Lebenserinnerungen, 1918の表紙には“Nach Testaments-bestimmung des Verfassers hrsg. von Oberlandesgerichtsrat Wilhelm Bruck in Kiel.“と記載されており、ブルックは遺言執行人としての業務の他に『回顧録』の編集についてもラーバントに託される立場にあった。因みに『回顧録』はラーバントの姪(弟の娘)であり、ブルックの従姉妹であるレジーナ・ラーバントの嫁ぎ先であるモッセ家のルードルフ・モッセ(Rudolf Mosse, 1843-1920)によって印刷された。

(42) SBB PK, Nachlass 488, A 0381,3, Bl. 26.

議するために送付させたものであると考えられる。⁽⁴³⁾それ故、遺言の大枠を除き、出版に関わる事項以外は省略されている。しかしこの史料から、①相続財産全体の構成（有価証券・預金債権／家財／蔵書／著作権・出版権）、②相続人（ルイーゼ・ブルック及びその子孫）、③著作権・出版権の受遺者（ヴィルヘルム・ブルック及びエルンスト・ブルック）、④著作権・出版権の扱い（原則的出版禁止、死後の補訂者の選定）、⑤遺言執行人（ヴィルヘルム・ブルック）が明らかになる。

史料 パウル・ラーバント自筆遺言抜粋
(SBB PK, Nachlass 488, A 0381, 3, Bl. 26)

III 169/18

我が自筆遺言

我が財産はベルリーンのディスコント合資会社及びシュトラースブルクの土地株式会社とエルザス＝ロートリンゲン地方金庫に寄託した有価証券と、上記の両銀行の当座勘定預金、更に家財、蔵書及び我が著作に対する著作権から成る。これまで作成した全ての終意処分を破棄し、最初から最後まで自筆で作成し、日付を記し、署名したこの遺言において、余は以下のことを定める。

第1条

我が相続人としてベルリーン在住の我が妹ルイーゼ（新姓ブルック）を指名する。この者が余より先に死亡し、または相続財産を拒否した場合はその4人の子、即ちヴィルヘルム・ブルック、エルンスト・ブルック、マルガレーテ・ヘルマン、マリー・アッシュが均等に相続人となる。もしこれらの一人が余よりも先に死亡したときはその子孫が相続人となる。

第2条

余は以下の財産を遺贈する。その完全かつ即時の実行は余の指名する遺言執行人によって行われるべきである。

1-4. 云々

5. 我が甥ヴィルヘルム・ブルック博士及びエルンスト・ブルック博士に

(43) W・ブルック自身が同封したものではない (vgl. Briefumschlag Amtsgerichts in Straßburg i. Els. an die Verlagsbuchhandlung J. C. B. Mohr vom 10. April 1918, SBB PK, Nachlass 488, A 0381,3, Bl. 26; Brief Paul Siebecks an Wilhelm Bruck vom 13. April 1918, SBB PK, Nachlass 488, A 0381, 3, Bl. 22: „Inzwischen ist mir auch vom Strassburger Nachlassgericht ein Auszug aus dem Testament Ihres Herrn Onkels zugegangen.“)。

共同して我が全著作の著作権を遺贈する。但し、講義案、講演、未印刷の鑑定意見書、書翰、その他の著作の公刊は、例えば個別の原稿が余によって公刊相当のものと宣言され、または印刷すべく定められているのでない限り、これを禁ずる。——我が大国法または小国法の新版が余の死後に必要となった場合には、前記の余の甥のいずれによっても補訂が引き受けられるべきではなく、第一にハイデルベルクのフリッツ・フライナー教授・博士によって、彼が補訂を引き受けられないまたは引き受けることを欲しないときはハイデルベルクのトーマ教授・博士によって、補充的に現在ゲッティンゲンの私講師であるパウル・レーネル博士によって補訂されるべきである。もし別段の合意がなされないときは補訂を引き受けた者に出版社書店と合意された謝金の半分が支払われるべきであり、残りの半分は上記の二人の甥に留まる。余の遺言のこの定めについてはテュービンゲンの出版社書店 J. C. B. モーア（パウル・ジーベック）に報知されるべきである、云々。

シュトラースブルク・イム・エルザス、1913年11月12日

本遺言は最初から最後まで自筆で作成し、日付を附し、署名したものである。

署名 パウル・ラーバント教授・博士

III 169/18

b. 我が自筆遺言及び1915年4月15日の追補の補充及び変更のため、余が自筆し、日付を附し、署名したこの終意処分により余は次のことを定める：

1-3 云々。

4. 我が遺言を修正し、余は次の如く定める。即ち、もし余の死後に我が大国法または小国法の補訂が必要になった場合には、第一に現在ライプツィヒにいるオットー・マイアー教授・博士に、第二に現在フライブルク・イム・ブライスガウにいるロジーン教授・博士に、第三に現在戦地にあるキールのイエリネク教授に提案されるべきである。云々。

6. 全遺贈の支弁後に我が遺産の価値が200000マルクを超えるときは、余剰分は相続人及び受遺者によって支払われるべき相続税の持ち分に応じた負担に用いられるべきである。

シュトラースブルク・イム・エルザス、1916年11月12日

署名 パウル・ラーバント教授・博士 真正枢密顧問官

上記の如く1918年3月28日に公表された本年3月23日の遺言を閲覧のためお送りします。同時に、キール（ニーマンスヴェーグ129番）の上級地方裁判所顧問官ブルック博士が遺言執行人であることをお知らせします。

シュトラースブルク, 1918年3月30日

皇帝の区裁判所

指示に基づき

[署名] ルンプ

裁判所書記官

宛: 書店 J. C. B. モーア (パウル・ジーベック)

チュービンゲン

„[25] III 169/18. Mein eigenhändiges Testament.

Mein Vermögen besteht aus den Effekten, welche ich bei der Diskonto-Commanditgesellschaft in Berlin und bei der Aktiengesellschaft für Boden und Kommunalkredit f. Els. Lothr. in Strassburg deponiert habe und meinem Kontokorrentguthaben beden [sic!] beiden genannten Banken; ferner aus meinem Mobiliar, meiner Bibliothek und dem Urheberrecht an meinen Schriften. Unter Aufhebung aller früher von mir getroffenen letztwilligen Verfügungen bestimme ich in diesem, von mir vom Anfang bis zum Ende eigenhändig geschriebenen, datierten und unterschriebenen Testament Folgendes:

Artikel I.

Zu meinem Erben setze ich meine Schwester Luise, verehelichte Bruck, wohnhaft in Berlin, ein. Sollte dieselbe vor mir sterben oder die Erbschaft ausschlagen, so treten an ihre Stelle als Erben ihre vier Kinder, Wilhelm und Ernst Bruck, Margarete Herrmann und Marie Asch zu gleichen Teilen, und falls eine dieser Personen vor mir sterben sollte, deren Abkömmlinge.

Artikel II.

Ich setze folgende Vermächtnisse aus, für deren vollkommene und rechtzeitige Ausführung der von mir ernannte Testamentsvollstrecker zu sorgen hat:

1)-4. pp.

5. Meinen Neffen Dr. Wilhelm Bruck und Dr. Ernst Bruck gemeinsam vermache ich das Urheberrecht an meinen sämtlichen Schriften. Ich untersage jedoch die Veröffentlichung von allen Kollegienheften, Vorträge, ungedruckte Gutachten, Briefen und allen andren Schriftstücken, sofern nicht etwa ein einzelnes Manuskript von mir als zur Veröffentlichung geeignet erklärt oder zum Druck bestimmt ist. – Wenn eine neue Auflage meines grossen oder kleinen Staatsrechts nach meinem Tode erforderlich werden sollte, so soll keiner meiner erwähnten beiden Neffen die Bearbeitung übernehmen, sondern dieselbe ist in erster Reihe Herrn Professor Dr. Fritz Fleiner in Heidelberg, und falls er die Bearbeitung nicht übernehmen kann

oder will, Herrn Professor Dr. Thoma in Heidelberg, eventuell Herr Dr. Paul Lenel, zur Zeit Privatdozent in Göttingen zu übertragen. Falls nicht eine andere Vereinbarung getroffen wird, ist demjenigen, welcher die Bearbeitung übernimmt, die Hälfte des mit der Verlagsbuchhandlung vereinbarten Honorars auszuzahlen, während die andere Hälfte meinen beiden erwähnten Nefen verbleibt.

Von dieser Bestimmung meines Testaments ist der Verlagsbuchhandlung J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) in Tübingen Kenntnis zu geben pp.

Strassburg im Elsass den 12. November 1913. (den zwölften November neunzehnhundert dreizehn

Dieses Testament habe ich vom Anfang bis zum Ende eigenhändig geschrieben, datiert und unterschrieben.

gez. Professor Dr. Paul Laband.

III 169/18 b. Zur Ergänzung und Abänderung meines eigenhändigen Testaments und des Nachtrags dazu vom 15. April 1915 bestimme ich durch diese von mir eigenhändig geschriebene, datierte und unterschriebene letztwillige Verfügung was folgt:

1-3 pp.

4. In Abänderung meines Testaments bestimme ich, dass falls nach meinem Tode eine Neubearbeitung meines grossen oder kleinen Staatsrechts erforderlich werden sollte, sie in erster Reihe Herrn Prof. Otto Mayer, zur Zeit in Leipzig, in zweiter Reihe Herrn Prof. Rosin, zur Zeit in Freiburg im Breisgau, in dritter Reihe Herrn Prof. Jellinek in Kiel, zur Zeit im Felde angeboten werden soll. pp.

6. Insoweit der Wert meines Nachlasses nach Entrichtung aller Vermächtnisse den Betrag von 200.000M (zweihunderttausend Mark) übersteigt, soll der Ueberschuss zur anteilmässigen Tragung der von den Erben und Vermächtnisnehmern zu zahlenden Erbschaftssteuer verwendet werden.

[25r.] Strassburg im Elsass, den 12ten November 1916 (den zwölften November neunzehnnundert [sic!] und sechzehn.

gez. Professor Dr. Paul Laband

Wirklicher Geheimer Rat.

Vorstehend wird Ihnen ein Auszug der am 28. März 1918 verkündeten Testamente des am 23. März d. Js. zur Kenntnis übersandt. Gleichzeitig wird Ihnen mitgeteilt, dass der Oberlandesgerichtsrat Dr. Bruck in Kiel, Niemannsweg 129 Testamentsvollstrecker ist.

Strassburg, den 30. März 1918.

Kaiserliches Amtsgericht
Auf Anordnung
[gez.] Rump
Gerichtssekretär
An die Buchhandlung J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
Tübingen.“

二 ラーバントの自筆遺言の完全版が史料として残存している可能性は限りなく低い。第二次世界大戦後、モア社はシュトラスブル地方裁判所に対し、未払いの謝金があるためとしてラーバントの相続人に関する情報提供を依頼しているが、これに対してシュトラスブル地方裁判所が「30年の保存期間の経過により廃棄されているため情報提供は不可能である」と回答しているためである。

史料 1969年6月29日、モア社発シュトラスブルク区裁判所宛照会
(SBB PK, Nachl. 488, A 0633,2, 1, Bl. 3)

1969年6月29日
...1918年3月23日にシュトラスブルクで逝去したパウル・ラーバント教授・博士の相続人に対してなお謝金の支払の必要がありうることから、なお問題になりうる相続人についてお知らせ頂ければ幸いに存じます。...
29. 9. 69 A/Be
An das Amtsgericht Straßbourg/Frankreich
Sehr geehrte Herren!
Da ich noch ein Honorar an die Erben von Prof. Dr. Paul Laband, gest. 23.3.1918 in Straßburg, auszahlen hätte, wäre ich Ihnen dankbar, wenn Sie mir evtl. noch in Frage kommende Erben bekanntgeben könnten.
Einen frankierten Rückumschlag habe ich beigefügt. Sonstige Kosten bitte ich, mir zu belasten.
Mit freundlichen Grüßen
J.C.B.Mohr (Paul Siebeck)
i.V.

史料 1969年10月 8 日 シュトラスブール地方裁判所発モーア社宛回答
(SBB PK, Nachl. 488, A 0633,2, 1, Bl. 2)

...1969年10月 8 日...

1969年 9 月29日のお手紙への返答として、残念ながら断定的返答によって満足して頂かざるを得ないことを謹んでお伝えいたします。30年の文書保存期間の経過による廃棄のため、パウル・ラーバント教授の相続人の痕跡を捜索することは当方には不可能です。...

Tribunal D'instance de Strasbourg (Bas-Rhin)

No Corr. gén.

(Rappeler ce No dans la réponse)

Strasbourg, le 8 octobre 1969

J.C.B. Mohr (Siebeck) Tübingen

En réponse à votre lettre du 29 septembre 1969, j'ai l'honneur de vous informer que je suis au regret de vous donner satisfaction par une réponse affirmative. En effet par suite d'élimination trentenaire des dossier il m'est impossible de trouver trace des éventuels héritiers du Professeur Paul Laband, Il vous appartient de vous adresser éventuellement au syndicat des notaires sis à Strasbourg – Rue de Dôme – Rue des Juifs – dont le président est Maître Joseph Geny, notaire à Schiltigheim (67) –

Le Secrétaire Greffier

des Successions: [gez.]

三 前節においてラーバントの親族関係を確認した。ラーバントは独身者であり、直系子孫は存在しない。更に1909年には妹ロザリーと弟アルベルトが相次いで逝去した。『ラーバント遺文集』に含まれる両親宛書翰から存在を推測される他の弟妹の消息は明らかではないが、少なくとも妹ルイーゼは存命であった。そもそもラーバントはルイーゼとその一家と極めて懇意にしており、ラーバントがベルリンに出掛ける際はいつも Magdeburger Strasse 32 (現 Kluckstraße) にあるブルック家に身⁽⁴⁴⁾を寄せていた。ラーバントは小児麻痺を患っていたエルンストのギム

(44) Etwa Brief Paul Labands an Friedrich Althoff vom 11. Oktober 1894: „In Folge Ihres sehr geehrten Schreibens, welches ich heut Nachmittag erhalten habe, werde ich an einem der nächsten Tage nach Berlin reisen und mir erlauben, Sie am Dienstag den 16ten dies. M. in Ihrem Bureau im Ministe-

ナジウム編入が拒否されるや、文部省のアルトホフに手紙を送って助力を求めたり、⁽⁴⁵⁾ ヴィルヘルムを連れてバイエルン・アルプスに旅行したりしている。⁽⁴⁶⁾ 老齢に達したラーバントの世話をしにチューリヒのドルダー・グランド・ホテルにまで随行したのも、ブルック家の姪であった。⁽⁴⁷⁾ また、ブルック兄弟はシュトラースブルクでも法学を勉強した法律家であった。これらの背景事情を前提とすれば、ラーバントの遺言の内容はごく自然なものとして理解することができる。

四 以上のことから、ラーバントの遺産という意味での本来の遺文集をその死後に最初に包括的に取得・管理したのは、甥であり遺言執行人であるヴィルヘルム・ブルックであったと考えられる。

第5節 『ラーバント遺文集』「法的鑑定意見書」の原目録

一 更に、連邦文書館作成の『目録』において“Rechtsgutachten, Vorträge und Abhandlungen, Kollegienhefte (Verzeichnis), o. Dat.“ と記載されているタイプ打ちの文書がある(BArch N 2161/19, Bl. 109 ff.)。Bl. 109の右肩には手書きで“Prof. Dr. Paul Laband Strassburg“ と記載され

rium aufzusuchen. In Berlin werde ich, wie immer, bei meinem Schwager, Herrn Bruck, Magdeburger Straße 32, wohnen, wo ich eine etwa erforderliche Benachrichtigung treffen würde.“

(45) Briefe Paul Labands an Friedrich Althoff vom 1. Oktober 1888 und 14. Oktober 1888, GStAPK VI. HA N1 Friedrich Theodor Althoff 817, Bl. 19, 20.

(46) Brief Paul Labands an Georg Jellinek vom 15. August 1892, BArch N 1136/15: „Berchtesgaden 15 August 1892 [...] Ich bin seit einigen Tagen auf einer Reise durch die nordtirolen u. bayrischen Gebirge hier und gedenke übermorgen von hier weiterzureisen, zunächst nach dem sogen. Salzkammergut. Mein Reisegefährte ist mein Neffe, ein Studios. juris W. Bruck, dem ich diesen Theil der Welt, in dem ich seit 20 Jahren nicht gewesen bin, zeige.“

(47) Brief [Marie?] Elisabeth Aschs an Paul Siebeck vom 23. August 1917, SBB PK Nachlass 488, A 0377, 5, Bl. 4: “[...] Als Nichte von Professor Laband erlaube ich mir [...]”.

ているが、誰の手によるものか判然としない（メルクルの字に近いように見えるが確実ではない）。この文書は①「法的鑑定意見書」、②「講演と論文」、③「講義案」の三部構成になっており、通しで1～110までの番号が振られている（但し45と47の間に46aと46bがある）。一見してラーバントの著作一覧・蔵書一覧でないことは明らかであり、この文書の中には例えば“104. Offene Handelsgesellschaft. (Scheint unvollständig zu sein.)“といった書き方が見られることから、少なくともラーバント以外の第三者によって作成されたものであることも明らかである。少なくとも、この目録は西側で伝承された『ラーバント遺文集』第19巻に収録されていることから、第二次大戦後に東側で作成されたものでないことも確実である。

史料 BArch N 2161/19, Bl. 109 ff.

A. Rechtsgutachten.

1. Rechtsgutachten für die kaiserl. königl. privil. Lemberg-Czernowitz-Jassy Eisenbahn-Gesellschaft. Februar 1891.
2. Denkschrift über die an den ehemaligen Wallgrundstücken in Frankfurt a.M. bestehenden Rechtsverhältnisse. Mit. Anl. 1-3. 2. Juni 1888.
3. Gutachten betreffend die Mannesmann'schen Bergwerkskonzessionen in Marokko. Februar 1910.
4. Über die Stadtverordnetenwahlen in Breslau. 23. Juni 1887.
5. Denkschrift für die Solvaywerke betr. Widerspruch gegen Erteilung einer Konzession an die neugegründetes Sodawerk in Oberhammer 1904.
6. Rechtsgutachten über einige Rechtsbeziehungen zwischen der Stadt Strassburg und der Gasanstalt. 1905.
7. Rechtsgutachten über die Erbfolge in der gräfl. Königsegg-Aulendorf'sche Familienfideikommiss Oroszlanko und Jllava. 1911.
8. Gutachten über das Stimmrecht der Aktionäre der deutsch-österreichischen Mannesmannröhrenwerke. 1900.
9. Rechtsgutachten an das Kriegsministerium über die Frage: Kann seine Majestät der König von Preussen einem Offizier den ihm einmal verliehenen Titel aus alleiniger Machtvollkommenheit wieder entziehen? 23. Mai 1905 [.]

10. Rechtsgutachten in der Anklagesache gegen den Obersten a. D. Gädke. 10. Juli 1907.
11. Gutachten über die Frage, ob zivilrechtliche Urtheile californischer Gerichte..... in Deutschland vollstreckbar seien. 1907.
12. Rechtsgutachten für die Rheinische Hypothekenbank in Mannheim. 1909.
13. Rechtsgutachten betr. die Niederfüllbacher Stiftung 30. März 1910.
14. Rechtsgutachten betr. die Succession in das Fürstl. Hanau'sche Familienfideikommiss. 1909.
15. Gutachten über die Erbfolge des Erbprinzen Emanuel zu Salm-Salm in das Fideikommiss Kopidlno und Altenberg. 1911.
16. Rechtsgutachten über die Frage, ob nach badischem Staatsrecht die Landstände befugt sind, gegen den Willen der Regierung die Mittel für eine schon bisher vorhandene ... Dienststelle... zu verweigern. 1912[.]
17. Rechtsgutachten betr. den § 25 der Bausatzungen der Stadt Offenbach a.M. Juli 1903.
18. Gutachten an den Statthalter Grafen v. Wedel betr. die els.-lothr. Nationalfahne. 1912 (Beiliegend der Brief des Grafen Wedel vom 29. Juli 1912)
19. Gutachten über die Befugnis des Besitzers des Reuss-Köstritzer Paradiums zur Ausübung seines Landtagsmandats. Juli 1912.
20. Gutachten in einer Erbschaftsangelegenheit J. Nehemias- Strassburg. 13. Mai 1911.
21. Gutachten über die Frage: Ist es nach der seit 1900 bestehenden Gesetzgebung möglich, für eine Darlehensforderung an einem in Baden gelegenen Stammgut ... eine Hypothek mit erstem Rang so zu bestellen... 1904.
22. Gutachten über die Thronfolge in Lippe. Umschlag: Lippe I. 1889-1894. II. 1894ff. (2 Fassikel)
23. Gutachten über den Rückkauf der schweizerischen Eisenbahnlinien 1899.
24. Gutachten für den Nationalliberalen Verein f.d. Wahlkreis Saarbrücken betr. den Wahlprotest der Zentrumsparthei gegen die Wahl Bassermanns. 1912.
25. Gutachten an Professor Schanz (Würzburg) über das Gehalt der emeritierten bayerischen Universitätsprofessoren. 8 Mai 1910.
26. Gutachten für die Hamburg-Amerikalinie betr. Unbrauchbarmachung der Schiffsmaschinen in auswärtigen Häfen. Mai 1916.
27. Rechtsgutachten über die Schiff[f]ahrt auf dem Ratzeburger See

(Lübeck) 26. Oktober 1911.

28. Gutachten für den Deutschen Ostmarken-Verein betr. Veräusserungsbeschränkungen für den Grundbesitz in Ostmarken. 12. Febr. 1911.

29. Gutachten für die Rombacher Hüttenwerke betr. Schürfungen auf Eisen-
erz. 1914.

30. Gutachten für die Stadt Frankfurt a. M. gegen den preussischen Fiskus
wegen erblosen Nachlasses. 1895 / 97.

31. Gutachten für den Prinzen Albrecht von Preussen betr. Herrschaften Flo-
tow und Krojanke. 24. Febr. 1885 und 12. März 1887.

32. Gutachten über das Bergregal des Herzogs von Arenberg in der
früheren Grafschaft Recklinghausen. 25. Juli 1895.

33. Rechtsgutachten über die Frage, welches die Stellung des kaiserlichen
Statthalters im Falle der Erklärung des Kriegszustandes ist... Strassburg. 29.
Juli 1899.

34. Rechtsgutachten über die verfassungsrechtliche^[n] Fragen, im Auftrage
der fürstl. Schwarzburg-Rudolstädter Regierung erstattet. 1912.

35. Rechtsgutachten zu der mecklenburgischen (Schwerin) Verfas-
sungsfrage. 12. März 1909.

36. Gutachten für die Illkircher Mühlenwerke betr. die Magdeburger
Feuerversicherungs-Gesellschaft. 1902.

37. Rechtsgutachten über die Panamakanalfrage vom Standpunkte des inter-
nationalen Rechts. 1912.

38. Gutachten für die Stadt Lübeck über die staatlichen Hoheitsrechte an der
Trave. 6. Aug. 1888.

39. Rechtsgutachten über den Gasvertrag der Stadt Metz. 1. Februar 1898[.]

40. Rechtsgutachten betr. des Privatbergregals der Herrschaft Myslowitz
1899.

41. Rechtsgutachten für die Westfälische Transport- Aktien-Gesellschaft betr.
den Dortmund-Ems-Kanal. 25. 6. 1911.

42. Rechtsgutachten über eine Ergänzung des Stammgutstatuts der Familie
der Freiherrn von Röder-Diersburg. Juli 1909.

43. Rechtsgutachten über den Rückkauf der Berner Oberland-Bahn (Inter-
laken-Lauterbrunnen-Grindelwald) Juli 1904.

44. Rechtsgutachten für das Bürgervorsteher-Kollegium der Stadt Hannover
betr. die Auslegung § 113 Absatz 1 der Hannoverschen Städteordnung. 1915.

45. Rechtsgutachten betr. die Gründerrechte bei der Breslauer Diskonto-
bank. 27. Januar 1898.

46 a). Sind die Lehrer an höheren städtischen Schulen in Preussen mittel-

- bare oder unmittelbare Staatsbeamte? 17. Febr. 1910.
- 46 b) [...] Rechtsgutachten betr. das Volksschulwesen in Frankfurt a.M. 24. Febr. 1910 (Roter Umschlag: Höhere Lehrer)
47. Rechtsgutachten betr. Auslegung des Testaments des Oberst-Leutn. von Krassow Juli 1902.
48. Rechtsgutachten betr. die Strassenbahnen in Strassburg. November 1911
49. Gutachten über die Ebenbürtigkeit und Successionsfähigkeit der Kinder Sr. Durchlaucht des Prinzen Alfred zu Salm-Salm. 5. August 1906.
50. Rechtsgutachten über die Erbfolge in die Zeil-Wurzach'schen Fide[i] kommissgüter 8. Novenber [sic!] 1906.
- dazu: a) Bemerkungen zu dem 2. Gutachten des Professor Rehm.
b) kritische Bemerkung zu dem Urteil des Königl. Landesgerichts in Ravensburg.
51. Denkschrift über die Standesrechte des Herzoglichen Hauses Schleswig-Holstein (Febr. 1893).
52. Gutachten über die Erbansprüche der Frau von Riepenhausen-Crangen auf die Hinterlassenschaft des Baron Alexander v. Stieglitz (ohne Dat.)
53. Gutachten für die Société Alsacienne de Constructions Mecaniques (Grafenstaden) 1890.
54. Rechtsgutachten für Herzog Georg Alexander v. Mecklenburg-Strelitz über die Frage: Hat ein Herzog von Mecklenburg-Strelitz das Recht, mit Genehmigung des Grossherzogs seinen Herzogtitel niederzulegen....? 1888. 4. Dez.
55. Rechtsgutachten an den Fürsten Max Egon v. Fürstenberg betr. Erbschaftssteuer. 30. Juli 1897.
56. Rechtsgutachten über das rechtliche Verhältnis der öffentlichen milden Stiftungen zu Frankfurt a.M. zur Stadtgemeinde 30. Juli 1899.
57. Rechtsgutachten für die Pensions-Anstalt der beeidigten Wechselmakler. 9. August 1896.
58. Rechtsgutachten für die staatsrechtlichen Eigentümlichkeiten der Armee- und Marinebefehle, welche auf der Kommandogewalt des Kaisers beruhen. 1898.
59. Denkschrift über die Verstaatlichung der Hessischen Ludwigs-Eisenbahn. 1893.
60. Rechtsgutachten über die Erbfolge-Ordnung in dem fürstl. und gräfl. Fuggerschen Hause. 1877 und 25. Oktober 1889.
61. Rechtsgutachten über die Frage, ob die Rheinische Hypothekenbank in Mannheim der Einkommensteuer in Preussen... unterworfen ist. 20. Sep-

tember 1892.

62. Rechtsgutachten für den Freiherrn v. Meutzingen [Mentzingen] betr. die Stammgüter 1911.

63. Rechtsgutachten über die Ansprüche des Herrn Grafen von Merenberg auf die Thronfolge in Luxemburg. 1907.

64. Rechtsgutachten für Prinz Albrecht zu Solms-Braunfels betr. Stammgüter 1897.

65. Gutachten über die Ebenbürtigkeit des herzoglichen Hauses Croy-Dülmen. 1916.

66. Rechtsgutachten betr. die Regulierung des Nachlasses des Fürsten Wilhelm zu Löwenstein-Wertheim-Freudenberg. 5. Nov. 1887.

67. Gutachten für einen ungenannten Hamburger Schweinemäster über die Frage: Ist die Hamburger Polizei berechtigt anzuordnen, dass die Schweinemästerei von ihrem jetzigen Platze zu entfernen sei.. (ohne Datum.)

68. Rechtsgutachten in Sachen Geissmann- von Smirnoff (Bern) 1905.8.Juli

69. Rechtsgutachten für die Illkircher Mühlenwerke über die Frage der Sonntagsarbeit. 6. Febr. 1906.

70. Gutachten betr. das Luzerner Armengesetz von 1889. 1905.

71. Rechtsgutachten über HGB § 237 für die Brauerei-Aktiengesellschaft Diedenhofen-Nieder-Jeutz. 1. Febr. 1906.

72. Rechtsgutachten für die 1. Els.-Lothr.-Unfall- und Haftpflicht-Versicherungsgesellschaft. 15. Oktober 1906.

73. Rechtsgutachten über die gerichtliche Zeugnispflicht der Abgeordneten des Herzogtums Sachsen-Meiningen. 1906.

74. Rechtsgutachten über die Frage, inwieweit die Vorschriften des Deutschen Bürgerl. Gesetzbuches §§ 1568 und 1573 sich mit denen des Code civil, insbesonrede Art. 273, decken oder von ihnen abweichen. (ohne Datum.)

75. Rechtsgutachten für das Kriegsministerium über die Frage, ob der Kaiser berechtigt ist, Truppenteile des Heeres kriegsbereit aufzustellen, und in Südwestafrika zu verwenden. 1904.

76. Rechtsgutachten für das Bürgerliche Brauhaus Gera betr. Rückerstattung von Kommunalsteuer für ausgeführtes Bier.. 1898.

77. Rechtsgutachten an den Bürgermeister von Weida betr. unentgeltliche Lieferung von Wasser an die Braugemeinde Weida. 7. Januar. 1901.

78. Rechtsgutachten betr. Erbschaftsangelegenheit Mariin Staub. 11. Oktober 1904.

79. Rechtsgutachten für die Lothringer Immobilien-Gesellschaft m.b.H. betr.

Verkehrssteuer vom 14.11.1905. 1905.

80. Gutachten an den Verein der Deutschen Standesherrn betr. die Doppelbesteuerung vom 13. Mai 1870. 8. Juli 1899

81. Rechtsgutachten über die Aufhebung der Privatposten und Entschädigung derselben. 1898.

82. Rechtsgutachten über die Berechtigung zur Führung des Prinzentitels für das Haus Thurn und Taxis. März 1912.

83. Rechtsgutachten zur griechischen Verfassung vom 17/29 November 1864. 24. Februar 1910.

84. Rechtsgutachten für das Warenhaus Wertheim Oktober 1909.

85. Gutachten in Sachen Gräfin Lonyay c/a König v. Belgien. 9. Januar 190 [sic!]

85a. Gutachten über die Rechtslage der Reichs-Post- und Telegraphenbeamtinnen 26. April 1914.

86. Gutachten über die Frage, ob die Kasernierungsbeiträge der elsass-lothring. Städte den rechtlichen Charakter einer Militärlast oder einer Ocotroirückvergütung haben. Juli 1914.

87. Gutachten über die Gebäudesteuer in Lübeck. 10. Februar 1901.

88. Gutachten in Sachen Ed. Mathis gegen die A.G. Alsalia (Feuerversicherung) 1890.

89. Rechtsgutachten betr. die Erbfolge in das Freiherrl. vom Stein'sche Fideikommiss. 1912.

90. Rechtsgutachten für den Herzog von Croy-Dülmens. 10. Juli 1904.

91. Rechtsgutachten : Die Erbensprüche des Herzogl. und Prinzl. Hauses von Looz und Corswarem auf das Fideikommiss Rheina-Wolbeck. 1. und 2. Rechtsgutachten 29. Juli 1908 und 25. Januar 1913.

B. Vorträge und Abhandlungen.

92. Das Sonderrecht der Kaufleute. 7. November 1905. Vortrag.

93. Die Chanpagnermessen. 18. Februar 1892. Vortrag.

94. Über Firmenrecht.

95. Börsenspiel und Differenzgeschäfte.

96. Was wird nach einem siegreichen Frieden aus Elsass-Lothringen?

97. Weibliche Kriegspflicht.

98. Die Verwandlung von Handelsschriften in Kriegsschiffe.

99. Autonomie in Elsass-Lothringen.

100. Wertmarken.

101. Die staatsrechtliche Stellung Elsass-Lothringens. Vortrag.
102. Über die Austrägalgerichte.
103. Die Verkündigung von Rechtsverordnungen des Bundesrats.
104. Offene Handelsgesellschaft. (Scheint unvollständig zu sein.)

C. Kollegienhefte.

105. Handelsrecht.
106. Bürgerliches Recht (Einleitung. Das Personenrecht. Sachenrecht. Familienrecht. Das Urherberrecht. D)]
107. Rechtsgeschichte.
108. Der Staat
109. Staatsrecht.
110. Handelsrechts-Praktikum

二 以上の目録を『ラーバント遺文集』に収録された「法的鑑定意見書」の「原目録 (Ur-Verzeichnis)」と推認させる材料が存在する。それは「法的鑑定意見書」(『ラーバント遺文集』第1巻～第17巻)のくるみ表紙または関連史料に青鉛筆で書き込まれた番号である。

番号記載の態様は『ラーバント遺文集』「法的鑑定意見書」の保管形態によって異なる。①表紙用の青い紙をくるみ表紙にしている史料(『ラーバント遺文集』第1巻の一部, 第2巻, 第4巻, 第7巻, 第9巻, 第10巻, 第11巻, 第13巻, 第14巻, 第15巻)及び②原稿用の紙と同質の紙をくるみ表紙にしている史料(『ラーバント遺文集』第8巻のうち2件[但し内1件については表紙に表題を欠く], 第12巻, 第16巻, 第17巻)には, 表紙にラーバントの筆跡による表題が附せられており, これらは生前の管理状況を引き継いだものと考えられるが, これらの範疇の簿冊には, 当該表紙に青鉛筆で番号が書き込まれている。これに対し, ③表紙を欠く史料も存在する(『ラーバント遺文集』第6巻, 第8巻のうち2件)。これらは史料に直接青鉛筆への数字記入が行われている。④『ラーバント遺文集』第5巻についてはポツダム＝ドイツ中央文書館所蔵時代に作成されたと思しきラベルに鉛筆で“63 Luxemburg”と記載

されている。理由は明らかではないが、何らかの理由で失われたくるみ表紙の記載情報を、文書館においてそのまま転記したものと推測することが可能であろう。⑤『ラーバント遺文集』第3巻は書籍と書籍カバーを収録するものであるから、ここでは考慮しない。因みに、くるみ表紙で画される史料単位が丸ごと帙に収められて一つの簿冊として管理されているもの（『ラーバント遺文集』第1巻を除き①の範疇の簿冊がこれに相当する。）は無論のこと、青鉛筆の書き込みだけがある頁についても、文書館によって文書に附される *Blattnummer* は附されていない。

重要なのは、これら東側伝承史料に書き込まれている番号と、西側伝承史料である上記目録が示す通し番号が案件において完全に合致している事実である。この対応関係を——『ラーバント遺文集』第1巻の「法制史講義案」（表紙及び前半部を欠く。）を除き専ら形式的な番号のみに着目して——表に示すと以下の通りである。

表 『ラーバント遺文集』及び「推定原目録」の対応関係

BArch N 2161/ N	Nr. beim Ur-Verzeichnis <i>und</i> Umschlag	Titel nach Ur-Verzeichnis
1	109	Staatsrecht
	108	Der Staat
	[107]	Rechtsgeschichte [Umschlag und Titelseite fallen.]
2	58	Rechtsgutachten für die staatsrechtlichen Eigentümlichkeiten der Armee- und Marinebefehle, welche auf der Kommandogewalt des Kaisers beruhen. 1898.
3	-	-
4	51	Denkschrift über die Standesrechte des Herzoglichen Hauses Schleswig-Holstein (Febr. 1893).
5	63	Rechtsgutachten über die Ansprüche des Herrn Grafen von Merenberg auf die Thronfolge in Luxemburg. 1907.
6	49	Gutachten über die Ebenbürtigkeit und Successionsfähigkeit der Kinder Sr. Durchlaucht des Prinzen Alfred zu Salm-Salm. 5. August 1906.
7	55	Rechtsgutachten an den Fürsten Max Egon v. Fürstenberg betr. Erbschaftssteuer. 30. Juli 1897.

ラーバント遺文集の史料論的研究

8	54	Rechtsgutachten für Herzog Georg Alexander v. Mecklenburg-Strelitz über die Frage : Hat ein Herzog von Mecklenburg-Strelitz das Recht, mit Genehmigung des Grossherzogs seinen Herzogtitel niederzulegen....? 1888. 4. Dez.
	53	Gutachten für die Société Alsacienne de Constructions Mecaniques (Grafenstaden) 1890.
	47	Rechtsgutachten betr. Auslegung des Testaments des Oberst-Leutn. von Krassow Juli 1902.
	52	Gutachten über die Erbensprüche der Frau von Riepenhausen-Crangen auf die Hinterlassenschaft des Baron Alexander v. Stieglitz (ohne Dat.)
9	60	Rechtsgutachten über die Erbfolge-Ordnung in dem fürstl. und gräfl. Fuggerschen Hause. 1877 und 25. Oktober 1889.
10	50	Rechtsgutachten über die Erbfolge in die Zeil-Wurzach'schen Fide[i]kommissgüter 8. November [sic!] 1906.
11	62	Rechtsgutachten für den Freiherrn v. Meutzingen betr. die Stammgüter 1911.
12	56	Rechtsgutachten über das rechtliche Verhältnis der öffentlichen milden Stiftungen zu Frankfurt a.M. zur Stadtgemeinde 30. Juli 1899.
13	57	Rechtsgutachten für die Pensions-Anstalt der beeidigten Wechsellmakler. 9. August 1896.
14	59	Denkschrift über die Verstaatlichung der Hessischen Ludwigs-Eisenbahn. 1893.
15	61	Rechtsgutachten über die Frage, ob die Rheinische Hypothekenbank in Mannheim der Einkommensteuer in Preussen... unterworfen ist. 20. September 1892.
16	48	Rechtsgutachten betr. die Strassenbahnen in Strassburg. November 1911
17	86	Gutachten über die Frage, ob die Kasernierungsbeiträge der elsass-lothring. Städte den rechtlichen Charakter einer Militärlat oder einer Octroirückvergütung haben. Juli 1914.

三 このことから、前記目録が『ラーバント遺文集』の「個人文書」と「法的鑑定意見書」の所蔵が分離する以前、すなわち「法的鑑定意見書」が遺族の手から失われる以前に作成されたものであることは確実に

あり、これを『ラーバント遺文集』『法的鑑定意見書』の「原目録」として推定することが可能である。

『ラーバント遺文集』『法的鑑定意見書』が遺族から失われた時期は明らかではないが、既に見たポピエラルスキ書翰によればブルックからエスバハに涉った時点でラーバントの両親宛書翰以上に価値のあるものは含まれていなかったという。そもそも前節に見たラーバントの遺言によれば、相続人はルイーゼ・ブルック及びその子孫とされ、著作権・出版権はブルック兄弟に遺贈されている以上、従兄弟の関係とはいえエスバハに頼まれたからといってブルックが原稿類を送付すべき理由も存在しない。また、ポピエラルスキ書翰はエスバハが取得したのは開戦後間もなくの時期であると証言しているが、それ以前にユダヤ人を襲った迫害を忘れることはできない。かつて『ラーバント遺文集』の研究を試みたベルンハルト・シュリンクは、「ラーバントの大甥の未亡人は、個人的遺文集は1938年11月9日のポグロムの夜に彼女の義父、即ちラーバントの甥にして遺族の住居が荒らされた際に破壊されたのではないかという考えであった」と証言している。⁽⁴⁸⁾シュリンクは関係者の氏名を明らかにしていないが、ここでいう「ラーバントの甥」はブルックである。⁽⁴⁹⁾更に、この目録を作成する動機のある人物もW・ブルックを描いてない。ブルックがラーバントの遺言によって『回顧録』を出版する必要があったことや、遺言に『ドイツ帝国国法』の補訂に関する指示が含まれていたことから推測すれば、少なくともブルックはラーバントの遺産に含ま

(48) Bernhard Schlink, Geleitwort, in: Paul Laband (bearbeitet von Bernd Schlüter), Staatsrechtliche Vorlesungen, Berlin 2004, S. 5.

(49) Schreiben von Herrn Bernhard Schlink an Naoki Fujikawa am 1. August 2024. [Bestand in meinem Besitz]. —シュリンク教授の情報提供は、筆者の側から「おそらくW・ブルックのことと思うが、エスバハなのかブルックなのか教えて頂きたい」と質問したことに対する回答である。なお、その他の記録（正確な氏名、日付、コンタクトの形式など）は残っておらず、30～40年前の出来事であるとの由である。

れる原稿類を早い段階で整理する必要に迫られたはずである。史料として残存しているブルックとモーア社との通信からは、ラーバントの死後直ちにブルックが『ドイツ帝国国法』補訂の案件を進めつつ、相続税申告のために著作権の金銭評価を求めるなど、遺言執行人としての事務を迅速に進めていたことが窺われる。また『ドイツ帝国国法』の著作権はヴィルヘルム・ブルックとエルンスト・ブルックが共同して有していたが、同じ史料群からは兄ヴィルヘルムがエルンストを代理するかたちで処理していることも分かるから、原稿類もまたヴィルヘルムが一人で管理したであろうとの推定が働く。⁽⁵⁰⁾

以上の理由により、上記の目録はラーバントの遺産に直接的なかたちで含まれていた法的鑑定意見書ほかの学術的著作原稿群について、ヴィルヘルム・ブルックによって作成された「原目録 (Ur-Verzeichnis)」であると推定することができる。

四 この推定が正しいとすれば、上記の対応表と併せ、更に次のことが導かれる。

(1) 現在の『ラーバント遺文集』「法的鑑定意見書」には「原目録」番号の48から63を中心とする合計21のユニットが残存している。これに対し、ラーバントの本来の遺産には111のユニットが存在したと考えられる。従って90ユニットの法的鑑定意見書、講演・論文原稿、講義案が失われている。

(2) 「原目録」は逸失史料の目録でもある。とりわけ依頼人に提出される性質のものである法的鑑定意見書については他の文書館等での調査の余地があるが、「原目録」はその際の恰好の参考資料を提供するものであり、⁽⁵¹⁾少なくとも扱われた案件の性格について概観を与えるものであ

(50) SBB PK Nachlass 488, A0381, 3, Bl. 1-26; Nachlass 488, A 0385, 4, Bl. 110-114. —なお『小国法』の補訂版はラーバントの希望通りオットー・マイアーによって引き受けられ、刊行された。

(51) なお、筆者の現時点までの調査によれば、「原目録」番号2 (GStAPK

る。

(3) 「原目録」はあくまでもラーバントの遺産に含まれた法的鑑定意見書、講演・論文原稿、講義案の原目録に過ぎず、ラーバントが生涯を通じて執筆した法的鑑定意見書の全てをリスト化したものではなく、ここに掲載されていない法的鑑定意見書が存在するの⁽⁵²⁾も当然である。

(4) 現在の『ラーバント遺文集』第1巻は3つのユニットからなる。第1巻には「原目録」番号108と109の表紙しか存在していないが、「原目録」を前提とすれば、第1巻に含まれる法制史に関する講義案の断片は「原目録」番号107の原稿であり、表題は「法制史 (Rechtsgeschichte)」であったと推定できる。従ってシュリューターの編集によるラーバント『国法講義』がこれに「国制史 (Verfassungsgeschichte)」という表題⁽⁵³⁾を与えているのは、史料上の根拠を欠く。

I. HA Rep. 120, C IX 7, Nr. 5 Bd. 1), 16 (Landesarchiv Baden-Württemberg, Abt. Generallandesarchiv Karlsruhe, 233 Nr. 3090), 37 (BArch RM 2/1809 a), 38 (Landesarchiv Baden-Württemberg, Abt. Hauptstaatsarchiv Stuttgart, E 74 Bü 449), 46b (ISG FFM A. 02. 01, S-611-2), 56 (ISG FFM, A.02.01, V-3-2) については各地の文書館に印刷、浄書または自筆版が存在することが確認できる (図書館での所属を確認できるものを除く)。

(52) 例えば Paul Laband, Die bischöflichen »Kleinen Seminare« in Elsass-Lothringen. Rechtsgutachten auf Veranlassung des Kaiserl. Statthalters von Elsass-Lothringen, in: Zeitschrift für Kirchenrecht 15 (1880), S. 49-64.

(53) 当該刊本が「法制史」を「国制史」と改題していることは、シュトラースブルク大学におけるラーバントの担当科目名が“Deutsche Reichs- und Rechtsgeschichte“, „Deutsche Staats- und Rechtsgeschichte“, „Deutsche Rechtsgeschichte nebst Grundzügen des Deutschen Privatrechts“であったこととの関係で不正確であるのみならず (担当科目は Verzeichnis der Vorlesungen welche an der Kaiser-Wilhelms-Universität Strassburg im Winter-Halbjahr 1900/01 vom 15. Oktober bis zum 23. März 1901 gehalten werden, Strassburg 1900 などの形式で残存している。ここでは逐一書誌を示さないが閲覧しえていない1898/99年冬学期から1900年夏学期までを除く87学期分の科目一覧を前提に述べた。), 上記の最後の科目名に示されるようにこの科目がドイツ法学者 (ゲルマニスト) によって担当されるべき科

(5) 現在の『ラーバント遺文集』第8巻（連邦文書館所蔵『ラーバント遺文集目録』に所謂“Vermögenshinterlassungen“）は、元来は4ユニットからなる。

なお、ポツダム＝ドイツ中央文書館移管以降現在に至る『ラーバント遺文集』の整理及び『ラーバント遺文集目録』掲載順序は「原目録」の番号と対応しておらず、かかる順序が採用された経緯は不明である。

第6節 『ラーバント遺文集』に含まれる非ラーバント由来の史料

残された問題は、現在の『ラーバント遺文集』に収録されている史料のうち、本来の意味でのラーバントの遺産に含まれない史料の伝承史を明らかにすることである。

一 「法的鑑定意見書」（第1巻～第17巻）は純粹にラーバントの遺産に含まれる史料であったと考えられる。

二 「個人文書」第18巻は『回顧録』2部とメルクル作成の備忘、ラーバントの胸像の写真を含むが、いずれもラーバントの遺産に由来するものではない。

(1) 『回顧録』は死後出版であり、もちろんラーバントが所蔵していたわけではない。但し、ラーバントの原稿がW・ブルックによって編纂・出版されたという意味では広義の遺産といえなくはない。ここに含まれる『回顧録』にはおそらくW・ブルックからエスバハが取得したと思しき⁽⁵⁴⁾原本版と、メルクルが作成したと思しき複製版が存在する。原本版の側には書き込みがある他、新聞記事の切り抜き2件が貼り付けられている。1件はオットー・シュトッベ（Otto Stobbe, 1831-1887）の壮行会に関する記事であり、冒頭に“[Abschiedsfeier für Professor

目であったことを見落とさせる点で、不適切である。

(54) 『ラーバント遺文集』第18巻収録の『回顧録』「複製版」が（本文に所謂）「原本版」の複製でないことは、例えばS. 35の書き込みを比較すれば明らかである。

Stobbe] Am 5. d. M. vereinigte ein von seinen früheren Schülern veranstaltetes glänzendes Souper in Galisch's Hotel eine große Anzahl von Verehren des nach Leipzig berufenen Prof. Dr. Stobbe [...]“とあり、シュトッベがライプツィヒに招聘された1872年のブレスラウにおける新聞記事と思われる。もう1件はラーバントの許にいた日本人学生がハラキリをするのにラーバントも「日本式決闘」を受けたといった新聞記事であり、詳細は第2章で検討するが、内容としては1890年代後半の出来事である。これらの切り抜きがラーバントに由来する可能は完全には排除されないが、『回顧録』の冊子がエスバハの所蔵である以上、切り抜きもエスバハ由来と考えるのが自然であろう（1872年の記事は法律家であったフリードリヒ・エスバハ（上記 F=C・エスバハの父）が所蔵していた可能性⁽⁵⁵⁾がある）。

(2) 『回顧録』の他に厚紙で挟んで簡易製本された史料はメルクル作成のメモの他、ラーバントの胸像の写真を含む。この写真には“Seine Excellenz der Kaiserlich deutsche Wirkliche Geheime Rath Professor Dr. jur et Dr. rer. pol. h. c. etc. Paul Laband.“と書かれた後に、“Von Onkel Paul! Strassburg i/Elsass, 9. Oktober 1907 Friedr.-Carl Esbach.“と書かれており、エスバハに由来するものであることが明らかである。⁽⁵⁵⁾

三 「個人文書」第19巻に収録されている史料の多くはラーバントに由来する。ここにはブレスラウ大学の学籍登録証明書（Bl. 2）、ハイデルベルク大学学籍登録証明書（Bl. 3）、洗礼証（Bl. 4）、教授資格取得を目的とする休暇証明書（Bl. 7）、軍役免除証明書（Bl. 9, 14）、教授資格申請書の写し（Bl. 11 f.）、各種辞令（Bl. 17 f., 20, 22, 23, 24, 37 ff., 59）、勲記（Bl. 63 ff.）が含まれている他、カール・ビンディング発信ラーバント宛書翰（Bl. 29 f., 31, 32）、ラーバント発信書翰原稿ないし控（Bl. 33 f., 35）、更には『回顧録』の未公刊部分と思しき原稿（Bl. 47 ff.）が

(55) なお1907は1908の誤りであろう。ラーバントが閣下称号を得たのも、名誉博士を与えられたのも1908年だからである。

収められている。なおこの巻の史料は概ね史料の成立年代順に配列されている。

しかし、この巻にもラーバントの遺産に含まれていたか疑わしい史料が少なからず含まれている。

(1) 教授資格申請書の写し (Bl. 11 f.) はタイプ打ち史料であり、作成日を“1961年”と誤記していることから、20世紀に入ってから作成されたものである可能性が高い。これを遺族によって作成された史料と断じる文献も存在する。⁽⁵⁶⁾ 手書きの加筆・修正箇所 (Bl. 11 における“bei Mommsen”) はなおラーバントの筆跡に類似しているようにも見えるが、いずれにせよ正確な作成者・作成時期は明らかではない。

(2) 1907年10月12日ラーバント発信 F=C・エスバハ宛書翰 (Bl. 57) は鉛筆書で冒頭の“Lieber Fritz!”のところに印がつけられ、余白に“Friedrich Carl Esbach. geb. 1870”と書き込まれている。筆跡はメルクルによる下記 Bl. 62 の鉛筆書きの部分に酷似している。ラーバントが発信した書翰がラーバントの遺産に含まれるとは考えにくいから、エスバハの遺産に含まれていた史料がメルクルのもとで『ラーバント遺文集』に同綴されたと推測される。

(3) 鉛筆書きで „Orden“ と書かれた薄緑色の厚紙 (Bl. 61) と、それに続く1966年6月20日付メルクル作成の勲記目録 (Bl. 62) はラーバント由来ではない。

(4) 「原目録」(Bl. 109 ff.) については既に作成者・作成時期を検討した。ブルックが作成し、エスバハに送付され、メルクルの手に涉ったものと考えられる。

(5) Paul Laband, Denkschrift über das Recht der Salzgewinnung, Strassburg 1878 (Bl. 115 ff.) には“Erbherrlich Esbachsche Bibliothek”という蔵書印が押され、表紙に“v. Esbach”と書き込みがある。

(56) Mußgnug, (Fn. 5), S. 4 Fn. 6.

前述の「法的鑑定意見書」(東側伝承史料)におけるような青鉛筆による数字の記載はなく、「原目録」にも対応するものはない。従って、この史料は恐らくエスバハ父から伝承した蔵書が、ラーバントの執筆によるものであることを理由として『ラーバント遺文集』に混入されたと考えられる。

(6) ポピエラルスキ書翰 (Bl. 134) については既に見た。

四 「個人文書」第20巻・第21巻(ラーバントの両親宛書翰)はラーバントの遺産に由来するものと考えられる。第2章で検討するように、ラーバントがこれらの書翰を『回顧録』執筆のための資料として利用しており、両親の死後に自らの手に取り戻したものと推測することも可能だからである。このように推測することは第4節に見た自筆遺言抜粋に著作権の対象として「書翰」が含まれていることとも平仄があう。

五 「個人文書」第22巻にもラーバントに由来しない史料が多く含まれている。各大学・学部からの祝辞の原本 (Bl 86 ff.) はラーバントに由来すると考えられるが、その他の史料は必ずしもラーバントに由来するものではないと推測される。

(1) DJZ 38 (1933) の年初号抜刷 (Bl. 1-34) はラーバント由来ではない。ブルック由来かエスバハ由来かは不詳。

(2) これに続く冊子体に綴られた史料群 (Bl 35-85) も由来不詳である。まず1908年の博士号取得50周年に贈られた祝辞をタイプ資料としてまとめた史料 (Bl. 36-52) はラーバント自身が作成する動機も不明であり、作成者不詳と考えるのが清潔な態度であろう。なお、ブルックは日常的にタイプライターを用いていた形跡がある。⁽⁵⁷⁾

(3) Bl. 53-56 に収録されている DJZ 13 (1908) Heft 9 (冒頭にラーバントの博士号取得50周年と70歳の誕生日への祝辞が掲載されている。) は表紙にラーバントの筆跡で書かれたテキストがあるが、これは当該号

(57) SBB PK, Nachl. 488, A 0381,3, Bl. 1-26; Nachl. 488, A 0385,4, Bl. 110-114 を参照のこと。

の全てに印刷されたものである。『ラーバント遺文集』収録の本史料においてはラーバントによる署名の箇所が切り取られているが、理由は詳らかではなく、本史料がラーバントに由来するものであるか否かも明らかではない。

(4) 博士号取得50周年・70歳の誕生日に関する新聞記事の切り抜き(Bl. 57-63)はラーバントに由来する可能性もないではないが、Bl. 61の書き込みはラーバントの筆跡によるものと思われない。

(5) Stutzによるお祝いの書翰(Bl. 64-65)はラーバント宛のものと考えられるので(“Threm Jubiläum“), ラーバントの遺産に含まれていたはずである。

(6) ラーバントの死亡を伝える新聞記事はラーバントに由来するものではない(Bl. 66-74)。

(7) その他、ラーバントの死亡に関する電報やブルック宛の手紙、追悼文の写しなどはラーバントに由来するものではない(Bl. 75-85)。

小括

以上の考察を基に『ラーバント遺文集』の伝承史を整理すると下記のように整理できる。

(1) ラーバントの遺産は、①有価証券・預金債権、②家具動産類、③蔵書、④著作権・出版権から構成された。その他に、⑤財産的価値を欠くラーバントの個人文書が存在した。著作権・出版権の対象となりうる原稿類(④に含まれる。)と、必ずしもラーバント自身が作成したものではない個人的な資料(⑤に含まれる。)は遺産それ自体のなかで地位を異にしたと考えられる。『回顧録』原稿及び書翰などラーバント自身の手によって書かれた原稿は本来④の範疇に含まれると考えられるが、『ラーバント遺文集』収録の「原目録」の対象とはならなかった(以下では④の範疇に含まれる史料として整理する。))。

(2) ラーバントの相続人はルイーゼ・ブルック(旧姓ラーバント)で

あり、著作権・出版権の受遺者はヴィルヘルム・ブルックとエルンスト・ブルックであった。従って、ラーバントの遺産のうち、①・②・③はルイーゼによって、④はブルック兄弟によって継承された。しかしながら、実際にはルイーゼの長子ヴィルヘルム・ブルックが遺言執行人としてラーバントの遺産の整理に当たっており、『ラーバント遺文集』を含むラーバントの遺産は全体としてブルックによって管理されたと考えられる。

(3) ラーバントの遺産のうち、蔵書(③)はシュトラースブルク大学図書館に購入され、その後、ドレースデンの図書館に移管された由である⁽⁵⁸⁾。また、上記の範疇からすれば②に属するものであると思われるが、ザクセン国王の発意によって作成された大理石製のラーバントの胸像はシュトラースブルク大学に寄贈されたようである⁽⁵⁹⁾。

(4) 著作権・出版権(④)の処理は、エルンスト・ブルックの同意のもとにヴィルヘルム・ブルックによって行われた。この範疇に属する遺産のうち、法的鑑定意見書、論文・講演原稿、講義案については、ヴィルヘルム・ブルックによって目録が作成された(本稿の所謂「原目録」)。これに含まれる史料群のその後の伝承経緯は不明であり、NS体制期に恐らくボグロムないし他の事情によりブルックの許から失われたという推測がなしうるに過ぎない。少なくとも、史料上、エスバハの手に涉った痕跡は確認できない。ラーバント宛の書翰類の多くは「法的鑑定意見書」関連史料として整理され、独立に整理されることはなかった。

これらの史料群は1945年にソヴェト赤軍によって接収された後、東ド

(58) https://www.siv.archives-nationales.culture.gouv.fr/siv/rechercheconsultation/consultation/ir/consultationIR.action?irId=FRAN_IR_001542&udId=c-2uaoswtr-fobdvgs6ddh9&details=true (abgerufen vom 29. Juni 2025.)

(59) Vorschlag Andreas v. Tuhrs an Senat vom 3. April 1918, Schreiben Andreas v. Tuhrs an Kurator und Wilhelm Bruck vom 19. April 1918 und Schreiben Wilhelm Brucks an Universität Straßburg vom 1. Oktober 1918, in: Archives l'Alsace, 103AL/535.

イツの図書館・文書館における管理を経て、ドイツ再統一後の1997年に連邦文書館に移管され、現在の『ラーバント遺文集』『法的鑑定意見書』を構成している。但し、「法的鑑定意見書」の範疇には少なくとも111ユニットの史料が存在したと考えられるところ、現存するのは21ユニットであり、少なくとも90ユニットの散逸が確認される。

(5) ラーバント宛の書翰のうち法的鑑定意見書の作成に関連しない部分については「法的鑑定意見書」とは別に管理されたと考えられる。また、ラーバントの両親宛書翰もラーバント宛書翰とは別に整理されたであろう。これらが個人的な文書類やブルックが作成した「原目録」などとともに、少なくとも1939年以降1942年以前に、ブルックからエスバハに引き渡された(『ラーバント遺文集』『個人文書』)。そのうち、ラーバントの両親宛書翰の多くの部分はエスバハによって焼却された。これらがエスバハの手に渡ったこと自体、遺贈の趣旨からして非正規的事態であったと考えられる。1933年時点でエスバハの手許に存在したとする連邦文書館作成『ラーバント遺文書目録』『前書』の説明は史料に反しており、維持できない。

(6) 1945年のエスバハ死後、『ラーバント遺文集』『個人文書』はエスバハの元家政婦ポピエラルスキによって保管され、1956年にメルクルに引き渡された。メルクルは備忘と整理のためにメモを作成し、『回顧録』の複製を作成した。1982年、『ラーバント遺文集』『個人文書』はメルクルによって彼が作成した備忘録とともに連邦文書館に寄贈された。また、エスバハによる取得以降、エスバハが所有していたラーバント関連史料が『ラーバント遺文集』『個人文書』とともに管理されるに至り、連邦文書館所蔵後も両者が区別されることなく同綴されて現在に至る。

(7) なお、同時代人によるラーバント宛書翰は現在の『ラーバント遺文集』に僅かしか残存していないが、ラーバント死亡時の遺産にどこまで含まれていたかについて判断するに足る史料的痕跡は見当たらない。

第2章 『ラーバント遺文集』収録史料の性格について

『ラーバント遺文集』収録史料の性格については、既にその多くについて第1章第6節において検証した。この章では残余の史料について若干の考察を加える。

第1節 「講義案」

『ラーバント遺文集』第1巻収録の「講義案」については、何よりシュトラスブルク大学におけるラーバントの講義科目との照合が必要である。シュトラスブルク大学の『講義一覽⁽⁶⁰⁾』によると、ラーバントの担当科目は概ね以下のようなものである。

表 シュトラスブルク大学におけるラーバントの担当科目

- | |
|---|
| <p>① 「商法・手形法・海商法 (Handels-, Wechsel- und Seerecht)」ないし「商法・手形法・船舶航行法 (Handels-, Wechsel- und Schiffahrtsrecht)」(1909年以降)</p> <p>② 「現代帝国国法特殊講義 (Ausgewählte Lehren des gegenwärtigen Reichsstaatsrechts)」(1872/73年冬学期のみ)</p> <p>③ 「ドイツ帝国史・法制史 (Deutsche Reichs- und Rechtsgeschichte)」; 「ドイツ国家史・法制史 (Deutsche Staats- und Rechtsgeschichte)」(1897年以降: 「ドイツ法制史・ドイツ私法綱要 (Deutsche Rechtsgeschichte nebst Grundzügen des Deutschen Privatrechts)」)</p> <p>④ 「ドイツ帝国国法・領邦国法 (Deutsches Reichs- und Landes-Staatsrecht)」; 「ドイツ国法 (Deutsches Staatsrecht)」(1874年夏学期のみ)</p> <p>⑤ 「ゲルマン法エクゼゲーズ (Germanistische exegetische Uebungen)」; 「ゲルマン法演習 (Germanistische Uebungen)」</p> <p>⑥ 「商法を考慮した私法演習 (Privatrechtspraktikum mit Berücksichtigung des Handelsrechts)」; 「商法演習 (Handelsrechtspraktikum)」</p> <p>⑦ 「ドイツ私法・レーエン法 (Deutsches Privatrecht mit Einschluss des Lehnrechts)」; 「ドイツ私法 (Deutsches Privatrecht)」</p> <p>⑧ 「BGB 草案を考慮したドイツ私法 (Deutsches Privatrecht mit Berücksichtigung des Entwurfs des bürgerlichen Gesetzbuches)」(1896年~1897</p> |
|---|

(60) Vgl. oben Fn. 53.

年)

⑨ 「民法第二部（物権法・家族法）（Bürgerliches Recht II. Theil (Sachen- und Familienrecht)）」（1901年～1903年）

⑩ 「民法第二部（物権法）（Bürgerliches Recht II. Theil (Sachenrecht)）」（1904年以降）

⑪ 「民法第三部（家族法）（Bürgerliches Recht III. Theil (Familienrecht)）」（1904年以降）；「民法第四部（家族法）（Bürgerliches Recht IV. Theil (Familienrecht)）」（1910年以降）

これを第1章第5節で考察した「原目録」と突き合わせれば次のことがいえる（但し『講義一覧』で予告された講義以外の講義を急遽担当することがありうることに注意を要する。）。

(1) 「原目録」番号106のうち、「民法入門」, 「人の法」, 「著作権法」に当たる担当科目は——⑧を除き——確認できない。

(2) 「ゲルマン法演習」の講義案は元来の遺産にも残存していなかったと考えられる。

(3) 「原目録」番号109「国家（Der Staat）」（『ラーバント遺文集』第1巻に収録。）に対応する科目（Staatsrecht, Allgemeines Staatsrecht, Allgemeine Staatslehre）は、『講義一覧』によればオットー・マイアー（Otto Mayer）、ヘルマン・レーム（Hermann Rehm）、M・E・マイアー（M. E. Mayer）によって担われており、ラーバントは担当していない可能性が高い。『ラーバント遺文集』収録の「国家」講義案は用途不詳である。

第2節 「法的鑑定意見書」

『ラーバント遺文集』第2巻、第4巻～第17巻には法的鑑定意見書の原稿または浄書版・印刷版のほか、依頼状や関連史料が含まれている。史料の残存の仕方は全く事案によるが、一般論として、①手稿原稿のみ残存するもの（『ラーバント遺文集』第2巻、第4巻、第6巻、第7巻、第8巻、第9巻、第10巻、第11巻、第12巻、第13巻、第14巻、第15巻、

第16巻, 第17巻), ②浄書版が残存するもの(第2巻), ③印刷版が残存するもの(第5巻, 第7巻, 第10巻, 第15巻)に大別できる。

法的鑑定意見書は依頼によって執筆し, 依頼人に送付する性質の文書である。従って, 基本的には依頼に応じて手稿で原稿を作成した後, ①自ら浄書⁽⁶¹⁾し, ②または業者に筆耕を依頼して浄書または印刷させた後に自署して送付するものである⁽⁶²⁾。場合によっては, ③依頼人が受領後に印刷版を作成することがある。この場合依頼人からラーバントに印刷版のサンプルが送られてくる場合もあろう。但し, その場合に, ラーバントが冊子体を「法的鑑定意見書」のファイルに分類したか, 蔵書に分類したかは, 必ずしも明らかではない。この点, 実例として分かりやすいのは, 『ラーバント遺文集』第12巻の「公共慈善財団とフランクフルト・アム・マイン市との法的関係」(「原目録」番号56番)に関する法的鑑定意見書の残存状況である。ラーバントに鑑定を依頼したフランクフルト市執行部文書(ISG FFM, A.02.01, V-3-2)には業者作成の浄書版にラーバントが自署した法的鑑定意見書とその印刷版が収録されているが, 『ラーバント遺文集』第12巻には手稿の原稿が残存しているに過ぎない。それは前記の法的鑑定意見書の実際的な性格によるものである。

『ラーバント遺文集』「法的鑑定意見書」はラーバント本来の遺産から大きな欠損を蒙っているが, 『ラーバント遺文集』第19巻の「原目録」が欠損リストを提供しており, 史料搜索の基礎として利用可能であり, 少なくとも依頼された案件について概観を得られることは既に第1章に述べた。

(61) BArch RM 2/1809a にラーバント自身の浄書による法的鑑定意見書(「原目録」37番)が残存している。

(62) ISG FFM A. 02. 01, S-611-2, Bl. 10 ff. および LABW GLA 233, 3090 に業者による浄書版にラーバントが加筆及び自署した法的鑑定意見書(「原目録」46b 番および16番)がある。

第3節 ラーバント『回顧録』未公刊断章

『ラーバント遺文集』第19巻には執筆時期と場所が明らかではない原稿が存在する（BArch N 2161/19, Bl. 47-56）。筆跡はラーバントのものであり、その内容は回顧録である。全12節構成で19頁に及ぶ短くない原稿であり、最後の第12節は明らかに未完である。この原稿はW・ブルックによってラーバントの死後に編集・刊行された『回顧録』の未公刊断章と推定することができるが、公刊されなかった一つの理由は末尾の節が未完だったからであろう。内容の多くはラーバントなりのウィットに富んだ叙述によって個人的なエピソードを伝えるものであるが、ハイデルベルク、ケーニヒスベルク、シュトラースブルクにおける彼の個人的な交友関係やイタリアの公法学界との連絡を示す点で貴重な情報を提供する。

なお、日本人にとって興味深いのは第8節である。この節は「ハラキリ」と題し、ラーバントの許で博士号取得を目指した日本人学生が、「博士試験に落第したら切腹しないといけません」と発言し、ラーバントの甥が「日本では落第させた教授の側も切腹するのだろう」と冗談を飛ばした結果、ラーバントが腹を切るらしいというニュースがシュトラースブルクを駆け巡ったというエピソードを伝えている。ラーバントは当該日本人の氏名を記載していないが、『ラーバント遺文集』第18巻『回顧録』冊子95頁に貼付されている名称・発行年月日不明の新聞記事の切り抜きは“Mitschiwauka”なる人名を伝えており、これを参考にす

(63) „Harakiri in Deutschland. Eine seltsame Begebenheit ist, wie Berl. Bl. geschrieben wird, dem berühmten Staatsrechtslehrer der Straßburger Universität, Professor Laband zugestoßen. Zu den Schülern des Genannten gehörte einige Semester hindurch ein junger Japaner, der auf den melodischen Namen Mitschiwauka hörte. Derselbe suchte mit Eifer und Fleiß in die geheimnißvollen Tiefen des deutschen Rechtslebens einzudringen. Das scheint ihm aber nicht gelungen zu sein; denn als er sich nach Verlauf einiger Jahre bei Professor Laband zum Doktorexamen meldete, da fiel er glänzend durch.

⁽⁶⁴⁾れば恐らく光岡正彰であろうと考えられる。光岡は1895年夏学期に学籍登録し、1897年夏学期まで在籍していたから、冗談で返した甥は1897年夏学期に学籍登録していたエルンスト・ブルックではないかと推測できる。⁽⁶⁵⁾

また、第9節はプロイセン王家のアウグスト・ヴィルヘルム公子の学修について記載しており、彼の許で熱心に学業に励み、法学博士を取得したことが述べられている。アウグスト・ヴィルヘルム公子の博士号取得についてはドイツの歴史家が疑わしい博士号取得だとしているが、⁽⁶⁶⁾

Nach diesem Mißerfolge schnürte Mitschiwauka ruhig sein Bündel und dampfte dem schönen Lande der Chrysanthemen und der Geishas zu. Professor Laband aber sollte noch einmal an seinen schlitzäugigen Schüler gemahnt werden. Anfang dieses Sommers erhielt er nämlich einen Brief aus Japan, in welchem ihm eine junge Japanerin, die sich als Verwandte Mitschiwaukas vorstellte, mittheilte, sie könne die Schmach, die ihrem Vetter widerfahren, nicht ertragen, werde ich an dem und dem Tage das Leben nehmen und hoffe bestimmt, der Herr Professor werde am nämlichen Tage das Gleiche thun! Also ein Fall von dem bekannten japanischen Duell per distance. Erkundigungen in Japan haben nun ergeben, daß die fragliche Dame thatsächlich an dem bestimmten Tage Selbstmord verübt hat. Professor Laband dagegen denkt nicht daran, das Harakiti an sich zu vollziehen. ...“ (BArch N 2161/18, Bl. 111)

(64) ここでは Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen. 1868–1914*, Berlin 2005 及びオンラインデータベース (<https://themen.crossasia.org/japans-studierende>) を用いた。

(65) 両者の学籍登録については Archives l'Alsace, 103AL/2; 103AL/3 で確認できる。光岡正彰は『国家学会雑誌』114号(1896年)に「在ストラスブルク光岡正彰君報」として「独乙通信」なる記事を寄稿している。光岡については『帝国鉄道協会会報』3巻1号に「日本鉄道会社庶務課」と記載があり(同社は1908年に国有化)、雑誌『日本主義』において「ドクトル」と自称しているようであるから(参照、木村悠之介「大日本協会『日本主義』『新天地』の基礎的事項と総目次」人文×社会2巻8号(2022年)268頁)、ラーバントの記述と一致する。なお光岡の学籍抹消時期については学籍登録簿の記載と前註資料の記述に齟齬があるが、ここでは前者を採った。

ラーバントの記述と一致しない部分がある。なお、ラーバントが「閣下」称号付きの真正枢密顧問官(Wirklicher Geheimer Rath mit dem Prädikat Excellenz)を得たのはこの功績によるものである。⁽⁶⁷⁾

ラーバントのこの未公開断章は本稿末尾に「附録」として翻訳・翻刻を掲げる。

第4節 ラーバントの両親宛書翰

『ラーバント遺文集』第20巻及び第21巻には、ラーバントから両親に宛てて1856年1月21日から1864年2月4日までにハイデルベルクやベルリンから発出された177通の書翰が収録されている（当然だが、ブレスラウに返っていた時期の書翰は存在しない）。現在この史料は簡易製本されていることによって完全性を保っているように錯覚されかねないが、この史料群が大きく欠損していることは既に『ラーバント遺文集目録』『前書』及びポピエラスキ書翰によって示されている。即ち、ブルックから（おそらく散逸後の）部分遺文集を託されたエスバハは本史料の価値に否定的であり、NS期のユダヤ人迫害にあって焼却したとされている。これらの史料が本来どの程度残存していたかは、ラーバント『回顧録』の記載と校合することによって、ある程度復元することができよ

(66) Lothar Machtan, Einen Doktor für den Prinzen, in: Die Zeit, Zeitverlag, Hamburg, 22. Oktober 2009, Nr. 44 (<https://www.zeit.de/2009/44/C-Kaisers-Doktor>; abgerufen am 29. Juni 2025). 同著者による Lothar Machtan, Der Kaisersohn bei Hitler, Hamburg 2006, S. 32 の記述も参照のこと。

(67) GStAPK, I. HA, Rep. 89, Nr. 3113, Bl. 91 ff. に修学関係の史料がある（シュトラースブルクでの修学については Bl. 190 ff.）。ラーバントは公子が法学博士号を取得したと述べるが（附録を参照）、von Roeder 少佐の報告史料には “Promotion als Doktor der Staatswissenschaften“ とある (aaO., Bl. 190)。また、同じ史料には “Unter den Lehrern Seiner Königlichen Hoheit nimmt Prof. Dr. Laband bei weitem die erste Stelle ein.“ とある (aaO., Bl. 190r)。ラーバントに対する栄典授与については Bl. 197r を参照のこと。Siehe auch: Laband, Lebenserinnerungen, S. 102.

表 ラーバント『回顧録』引用書翰と『ラーバント遺文集』収録書翰の対応

『回顧録』頁	日付	『ラーバント遺文集』 収録の対応書翰
S. 25	September 1855	-
S. 26	25. 11. 1855	-
S. 27	?	-
S. 27	27. 10. 1855	-
S. 28	21. 11. 1855	-
S. 34	26. 4. 1856	-
S. 36	12. 1. 1857	BArch N 2161/20, Bl. 86
S. 52	15. 5. 1862	BArch N 2161/21, Bl. 52
S. 52	2. 6. 1862	BArch N 2161/21, Bl. 56 f.
S. 52	27. 7. 1862	BArch N 2161/21, Bl. 69 f.
S. 54	26. 2. 1864	BArch N 2161/21, Bl. 123 f.
S. 55	15. 4. 1864	-
S. 55	21. 4. 1864	-
S. 55	17. 11. 1864	-
S. 58	7. 1. 1866	-
S. 58	18. 12. 1867	-
S. 64	17. 7. 1867	-
S. 64	23. 4. 1865	-
S. 64	29. 10. 1865	-
S. 64	29. 4. 1866	-
S. 67	30. 7. 1869	-
S. 67	23. 10. 1871	-
S. 68	31. 10. 1871	-
S. 68	12. 12. 1871	-
S. 69	31. 12. 1871	-
S. 70	15. 3. 1872	-
S. 71	21. 3. 1872	-
S. 77	„meine wöchentlichen Briefe an meine Mutter“ (nach 1872)	-
S. 95	21. 6. 1887	-
S. 107	7. 9. 1893	-

う。何故ならラーバントの『回顧録』には両親または妹宛の書簡がしばしば引用されており、この書翰群は『回顧録』執筆の際の第一次的な史料として利用されたと考えられるからである。

『ラーバント遺文集』第20巻・第21巻とラーバント『回顧録』を突き合わせれば前頁の表ようになる。この表から、現在残存している書翰群はあくまでも例外的に残された史料であり、殆どの書翰は実際に焼却されて失われたことが確認される。

おわりに

本稿は、『ラーバント遺文集』の伝承過程を検討し、これに含まれる史料の性格を考証した。ラーバントの個人史的研究のための資料は公刊物だけでも膨大であり、とりわけ学問史的伝記研究においてはそうした公刊物を基礎とすべきことは敢えていうまでもない。しかし、『ラーバント遺文集』は法的鑑定意見書の執筆を通じたラーバントの実践的活動を知る手がかりを与えるだけでなく、親族や学友、同僚との交流関係を知る基礎的な史料を提供するものである。『ラーバント遺文集』へのアクセスが可能である以上、学問の主戦場が公刊された学術的著作の読解にあるという理由によっても、これを端的に利活用しないことそれ自体を正当化することはできないであろう。

もとより個人に着目した伝記的研究は、対象人物を必ずしも終始一貫した観念の担い手として観察するわけではない。それはラーバントについても例外ではない。ラーバントが70歳を迎え、『ドイツ法曹新聞(DJZ)』にO・リープマンの祝辞が掲載された折、当該号にはラーバントの自筆による次のような文句が署名とともに添えられ、印刷された。

「法とは一つの思考の世界である。それは論理が主権者であると同時に、宮廷道化師の大仰な口上でもあるような世界なのだ。(„Das Recht ist eine Welt der Gedanken, in welcher die Logik der Souverain und die

pathetische Phrase der Schalksnarr ist.“⁽⁶⁸⁾」

この一文は、法学的論理性を格率としつつも、そこに潜むある種の滑稽さ・危うさ・不確実さを意識している、必ずしも単純に割り切ることのできないラーバントの法学観を示すものといえよう。その内実と、ラーバントの生涯においてありえたかもしれない思考の変遷過程を、彼の学問的著述と実践的活動から具象的に明らかにすることがラーバントを対象とする個人史的研究に期待される課題であり、本稿はあくまでもそのための史料的基础を確認する予備的作業に過ぎない。

※ 本稿は「ドイツ第二帝政期におけるラーバントの法学と実践的活動に関する個人史的研究」(科学研究費基盤研究 C:22K01129)の成果である。

(68) Autogramm Paul Labands bei Otto Liebmann, Paul Laband zu seinem 50jährigen doktorjubiläum – zu seinem 70. Geburtstag, in: DJZ 13 (1908), Sp. 497 ff. [497 f.].

附録 ラーバント『回顧録』未公刊断章——翻訳と翻刻——

1. 家宅搜索

1863年冬の午後3時、ドアがノックされ、不意を突いて吃驚させようとするかのように嵐のように慌てた様子で、当時同僚だったオンケン〔Wilhelm Oncken, 1838-1905〕が這入ってきた。実際、かくも普通ではない時間帯の訪問に驚き、如何した訳か問い詰めたくなった。彼は私の方に向き直り、全く無邪気な会話を始めた。しかし彼は探偵のように注意深く私の部屋の調度、家具、絵、壁の風味などをジロジロ見て、怪しい有様であった。彼は私の住居に話題を変え、部屋はいくつあるかと聞いてきた。自分たちが居るリビング兼仕事部屋の他は隣に寝室があるだけだと答えると、見せてくれと頼んできた。非常におかしい感じのする希望をかなえてやると、彼は非常に詳細に部屋の調度や置物を注視しただけでなく、突然クローゼットを開け、中にあったスーツを検査して、もう部屋はないんだと真剣に問うてきた。そこでかくも風変わりな振舞について説明を求めると、笑って次のように語った。——数日前、ホイザー〔Ludwig Häusser, 1818-1867〕のところで開催された舞踏会にいた折、ホイザー夫人としきりに歓談していたのだが、私は老いた聲の、少なくとも随分と難聴の「パニエル小母さん⁽⁶⁹⁾」に、奥様の具合はよくなったかしらと訊かれて肯定した、らしい。私が質問を誤解したか、パニエル小母さんが自分の返事を誤解したのであろう。舞踏会ですぐに、私が秘かに結婚していた、私自身が〔いないはずの〕妻について語り、具合がよくなりましたと説明したのだ、という面白いニュースが広がったそうだ。その結果、若いお嬢さん方の間で私に対する物凄い憤慨が巻き起こり、フェーム判決を受けるべしといった有様であったのだという。とはいえ、まずは犯罪が証明されなければならないとして、可愛くて愛嬌のあるオンケンの妹がこの課題を引き受け、彼女の女友達連中と一緒にオンケンにしつこくするので、オンケンはずいぶん音を立てて噂が本当か実地検分で確かめることにしたのだ。次の舞踏会の折、私はオンケン嬢をテーブルに誘い、この出来事を愉快的会話の種にしたのだった。

(69) ホイザーの母の生家パニエル (Paniel) 家の女性であろう。Vgl. Peter Fuchs, Ludwig Häusser, in: NDB 7 (1966), S. 456.

2. 2つの良き教訓

ケーニヒスベルクに招聘されたとき、文部省次官補のところに通例の訪問を行った。歓談のなかで彼は私に言った：ケーニヒスベルクは安く住める街ではないですよ、貴方の少ない俸給では大きな跳躍もできないでしょう。でもあそこには裕福な商家のお嬢さんが大勢いますから、貴方のように将来有望な若い教授は簡単にお金を工面できますよ、と。私はこのすばらしい助言に最大限の感謝を述べ、それではケーニヒスベルクではすぐに所得税詐欺犯を探しましょうと言った。次官補は嫌味に気づき、しぶしぶ会話を打ち切ったのである。

到着後間もなく用務員が四半期分の俸給を持ってきたとき、彼は誤解のしようがない意図をもってこういった：教授殿、一つ申し上げたいのですが、ここケーニヒスベルクでは誰も指濡らしの一つも持ってきませんからね、チップを頂かないことには。

3. トッゲンブルクのシスター

最初、ケーニヒスベルクではシュタインダムの地階の部屋に住んでいた。向かいの1階には士官が住んでいて、その部屋からは私の仕事部屋、しかもちょうど仕事机を覗くことができた。その士官には2人のかわいい子供——男の子と女の子——がいて、私の性格と習慣から彼らとはすぐに仲良くなった。私は彼らが学校で勉強したことを試問したり、なぞなぞを出したり、昔話を語り聞かせたり、たまにお菓子や小さいおもちゃを贈ったりしていた。彼らの母親ももちろんそれにはすぐに気づいた。彼女はいつも何か家事をしていて窓辺に座っていたのだが、すぐ、道端で遭遇したり他にお目にかかったりすることがあればお互い挨拶する仲になった。彼女はやせたご婦人で、黒髪・黒目、顔の血色は悪く、非常に憂鬱で悲哀を含んだ表情をしていた。ある日、彼女から次のような手紙を受け取った。

親愛なる教授殿！奇妙に思われるかもしれませんが一つお願いがございます。誤解なさいませんよう、また軽蔑嘲笑なされませんようお願いします。私の夫が毎晩士官カジノで〔トランプの〕スカートに興じ、子供たちは寝てしまいますので、貴方が仕事机に向かって研究されているのを見ているのが嬉しいのです。ですので、夕方灯りをつけられる際は雨戸を閉じられませんかようお願いいたします。エラ・フォン・N

このお願いには非常にいやな気持ちになって、手紙を端的に無視してしまって雨戸もいつも通り閉めてしまおうというのが最初の気持ちであった。ただ、それは余りにも非友好的に思われ、フォン・N夫人に手紙を認めてお願いの儀を丁重にお断りすることが必要だろうと考えた。ところがいざ手紙を書こうとすると、適切な形式を見つけられなかった。私は、他人の知的活動をただ見ていることで自らの慰めにするほど婚姻生活を孤独かつ心細く過ごしている不幸な夫人に同情を感じた。お願いの内容も聞き入れられないほど酷いものではないようにも思われた。それ故、研究中ずっと観察されていることに居心地の悪さを感じながらも雨戸を開けたのである。もっとも、夕方は頻繁に人に招かれたりコンサートや劇場、集会などに行くなどその他の理由で家にはいなかったから、私の部屋に灯りがついていることの方が少なかったのだが。

私の弱さと気前の良さは、しかし非常に珍妙な結果をまねいた。或る寒い冬の日の遅い時間、ポーターがやってきて、門扉のところにご婦人が立っていて、私と至急話したいことがあるから出てくるよう頼んで欲しいといわれたのだと伝えてきた。果してフォン・N夫人であった。彼女は私に、ちょっと付き合って相談に乗ってほしいとお願いしてきた。さては離婚の話で、子供たちのことについて私の法的助言が欲しいのだろうなと思っていたら、もっと悪い話であった。彼女はひどく不幸な婚姻生活を嘆き、彼女の夫は軍事にしか興味のない人で夕方は夜中までカジノでカードゲームに興じて過ごしており、彼女には夫と心で繋がっているという感じが欠けているのだというのだ。夫は妻の社交的需要にも精神的需要にも心を砕かず、彼女は夫の単なる家政婦でこんな生活にはこれ以上耐えられないのだ、と。私は彼女を慰めようと試みて、多くの女性が同じ運命に耐えないといけなことを思い出させようとしたが、もちろん私の言葉は風の中に消えていった。そうこうしているうちに、暗く人気のない門のところに着いた。そこで突然、彼女は私の前で雪の中深く崩れ落ち、私の膝に抱き着き、嵐の如く涙して、自分を助け出し連れ去ってくれと哀願したのである。すぐに自分と一緒に駅にむかって、(実際何も持っていなかったのだが)旅行鞆も旅行のお金もなく、夜行列車でどこへなりとも行ってくれと。そんな計画を実行することは全く不可能だと彼女を説得するのに大いに骨を折り、漸く落ち着かせて、来た道を帰って我々の家の門扉まで連れてくることができた。次の夕方以降、我が家

の雨戸は再び閉じられた。私は住居を解約し、街の離れたところ——向かいには証券取引所の庭があるだけで住居のないところ——に引っ越して事柄に決着をつけたのである。その夜以降、フォン・N夫人の消息は聞かない。

数年後、ケーニヒスベルクを久しく去ることとなり、この愛すべき街から私を連れ出す急行列車にもう座っていたとき、駅のホームに黒衣に身を包みふかくベールを被ったご婦人が車両沿いに歩き、旅客を嗅ぎまわっているのに気付いた。もしやフォン・N夫人ではないか、私のところに乗り込んでくるつもり、少なくともお別れを言いにくるつもりではないかという考えが脳裏に過った。私は可能な限り後ろに凭れかかり、頭を窓のカーテンに隠して、実際列車の出発まで気づかれずに済んだ。因みに私の想像というか虞れが正しかったかどうかは分らない。

4. 危うく舞台で大成功

1867年聖霊降臨祭の頃、ケーニヒスベルクの枢密商事顧問ジーモンが彼の主催する浜辺への遠足に数日参加するように言ってきた。ケーニヒスベルクの東海岸には殆どまだ行ったことがなかったこともあって、喜んで招待を受けた。この遠足の参加者にL嬢がいた。彼女は若くて上品なおペラ歌手で、劇場委員会で重要な役割を演じているジーモン氏に大変量厚にされていた。この若い歌手は、当時は若手だったが、私の記憶が正確であれば、後にアムステルダムのドイツ劇場の主演歌手になった。小旅行中のある食事の際、私は彼女とテーブルで隣になって、彼女と「恋人同士で食べる風習のある」いわゆる双子アーモンドを分け合って食べた。当然、私はそんな仲になるつもりはなくて、実際にそうはならなかったのだが。ケーニヒスベルクに帰った後、花束を贈って非礼を詫びた。L嬢はこの日、二幕構成のオペラ『グラナダの野営』でメインパートを歌うことになっていて、浜辺への遠足の参加者全員が劇場に見に行くことと約束していたのである。私も仕切り席に座っていた。幕間、ジーモン氏が私のところにきて、L嬢が舞台裏に来て欲しいと言っていると伝えてきた。なんでも花束のお礼を言いたいらしい。私は劇場で舞台裏に行ったことがないし、道も分からないので、お礼は別の機会にと断った。しかしジーモン氏が直ぐに戻ってきて、是が非でも舞台の方に上がってくれと言った。私がこないと言われないと言っていて、そうすると私がもっとまずい不都合を招来してしまうことになるというのであ

る。あれやこれやとごまかされて遂に彼の言うことに従うことにし、彼に連れられて舞台に上がった。そこでL嬢は2つの楽屋の間で私を待っていて、フレンドリーに挨拶してきた。しかしそうこうしているうちに幕間の休憩時間が終わり、二三言も言葉を交わさないうちにベルが鳴った。お願いだから早く行って、すぐ出番なの、と彼女は叫んだ。ところが不案内で迷子になってしまい走って舞台の方に上がってしまった。まさに幕が上がり始めていて、観客から膝まで見えるかというところで素早く舞台袖に身を隠した。一秒遅ければケーニヒスベルクの観客の前に舞台上で現れることになり、疑いなくこのうえなく笑いを誘ったことだろう。

5. 監禁と釈放

或る日曜日の午後、ラカー〔Ludwig Laqueur, 1839-1909; シュトラースブルク大学医学部眼科教授〕教授夫妻と一緒にレンヒタールに遠足に行った。オルテンベルクのゲストハウスの一つで夕食を取る前に、街の上にあるお城と一般公開されている附属の庭園に急いで行って、そこからの夕景を見に行った。シュトラースブルクへの終電まで余り時間がなく、庭園の出口まで急ぐと、恐るべきことに門が閉まっていた。いくら呼んでも無駄であった。城で唯一、人が住んでいる部屋は管理人の部屋だけであり、小さい村の家々は我々の声を拾うには余りに距離があった。我々は非常に痛々しい状態にあった。かなり歩いたので空腹で、食べるものももっていなかった。夏の気温だったから暖かいタオルその他ももっておらず、日が落ちると随分と冷えてきた。一晚を山のなかで過ごす覚悟を決めなければならず、翌朝、朝の列車に乗って講義に間に合うようにシュトラースブルクに帰れるような時間帯に我々の存在に気づかれるかも疑わしかった。私はこの冒険を楽観的に考え、冗談めかして最後の煙草に火をつけた。ラカー夫人は家の子供たちのもとに帰れないことに気を揉んでいた。だが、何ができようか。人は運命を受け入れなければならないとごく平凡な諺も謂っている。庭園の東屋に行くと、テーブルと二脚の椅子があった。テーブルにはウールの編みタオルが置かれていた。これが我々の助けになるはずだ。ほどなくして管理人の夫人が東屋に入ってきて、我々を見て驚いて声を失った。彼女はウールのタオルをテーブルに置いていて、夕方の散歩をしようとタオルを取りに来たのである。彼女によって我々は囚われの身から解放されたのである。

6. 不幸中の幸い

1870年代の或る夏、同僚のシュミーデベルク教授〔Oswald Schmiedeberg, 1838-1921; シュトラースブルク大学医学部薬理学教授〕とともにポンテレシナに旅行した。或るいい晴れた日にベルニーナハウスに行こうと一頭立ての馬車に乗った。ベルニーナ鉄道はまだ建設されていなかったのである。それほどの距離を乗らないうちに徒歩で向かっていたラスカー衆議院議員〔Eduard Lasker, 1829-1884 ?〕に追いついた。御者台にまだ座れるスペースがあったので、我々是一緒に乗らないかと誘った。彼はしかし断固と断った。登り坂に差し掛かると、御者はいつも通り御者台から降りて馬の横や前を歩いていた。突然、路上の何かに驚いたのか、もしかすると道を動物が横切ったのか、馬がおびえて暴れだした。御者は馬の方に飛び乗って手綱をしっかりと握った。ところが馬は後ろ足で立ち上がって横に飛び跳ね、道の端から落下し、馬車と御者を引っ張って道づれにしてしまった。落下は高さこそなかったが非常に危険であった。馬車道の下芝生には大きい岩があちこち転がっていて、我々がまさに岩をよけて芝生に落下したのは殆ど嘘みたいな幸運であった。我々は傘の下にいるかのように馬車に張られた幌の下にあり、御者は馬の下敷きになっていた。シュミーデベルクは殆ど無傷で、私はいくつか大したことの無いすり傷を負っただけであった。我々は転倒した馬車からなるべく速やかに這い出し、馬の下敷きになって危ない状態の御者を引っ張り出した。それからベルニーナ通りのゲストハウスまで歩いてハイキングし、顔と手を洗って事故の痕跡を拭い、美味しい昼食と〔ワインの〕サッセル一瓶で元気を出したのである。もしラスカーが我々の申し出を受けて3人のうち1人が御者台に座っていたら、その人はおそらく岩に頭から落ちて死んでいたか重傷を負っていただろう。

7. 棺のなかの一夜

私講師だったとき、一人で余りお金も持たずハイデルベルクから北チロルを徒歩で旅したことがある。或る蒸し暑い日のこと、私のカバンを持ってくれた若いガイドと一緒に、もう名前も思い出せないが、或る所に向かってハイキングしようとした。夕方、嵐が近づいてきた。遠くで稲光と雷鳴がし、雨が降り始めた。嵐はどんどん近づき、雨はますます激しくなり、如雨露から水を注ぐようであった。はっきりなしに雷は鳴り、夜の帳が降りて暗くな

り、ただ稲妻の光条の煌めきに照らされるばかりであった。私は皮膚まですっかり濡れ、死ぬほど疲れてしまい、それ以上は殆ど進めないところであった。向かっていた村からは何も見えず、びしゃびしゃのでぼこ道は果てしなく見えた。漸く遠くに灯りが見え、ハイキングの目標に到達する新しい希望が私を勇気づけた。灯りを漏らしていた家が道沿いに散在していた。〔目的地〕Xまでまだ距離はあるかと問うと、破滅的な回答が帰ってきた。曰く、優に30分はかかると。実際、それ以上歩けるような状態ではなかっただろうが、夜を〔この村で〕過ごせないのだろうかと言くと、かなりつつけんどんに無理だといわれた。旅館ではないし、知らない人を泊める用意はないと。私が何度もお願いしたこと、荒れた天気、夜の暗さ、道中の危険を考慮して、彼らは折れて、私が一晩泊まることを了承した。ただ、自分たちが提供できるもので我慢してくれよ、というわけである。私が灯りのついた部屋に入り、亭主と女将さんは私を見て、また私と喋り、私が浮浪者でないことに得心してから、彼らは非常に友好的になった。女将さんは厨房で私の服を乾かしてくれ、亭主はローデンのコートをかぶせてくれて、私とガイドに夕食を準備してくれた。ずぶ濡れになって雷雨に晒されて凍えるようだったから、グリュウヴァインを所望した。ところが亭主と女将はそれが何か分からないと明かした。私が彼らにレシピを教えると、私の監督のもとにそれを用意してくれた。グリュウヴァインは非常にいい出来で、亭主と女将にもおいしく感じられ、私が健康にもとてもいいですよと請け合ったために、亭主は身体の状態をよくするためと精神を強化するためにちょくちょくグラス一杯グリュウヴァインを飲もうと宣言した。さて、眠りたかったので、寝台を指示するようお願いした。私は上の階に連れていかれたが、驚くべきことに、そこは黒や黄色の、大小さまざまなシンプルなのから装飾されたのまである棺桶の倉庫であり、壁には十字架や聖母像がかけられていた。亭主は棺桶職人だったのだ。棺桶の一つのなかに非常にきれいなベットが準備されていて、そのなかで私は疲労とグリュウヴァインのために一晩中静かにぐっすり眠った。それ故、棺桶のなかの静かさも悪いものではないことは経験から知っており、恐怖することなく待ち受けているわけである。

8. ハラキリ

或る夕方、私はシュトラースブルクのブルシェンシャフトの「祝賀会」に

ブルシェンシャフトに所属していた私の甥の一人〔Ernst Bruck か〕と一緒に座っていた。私の隣には日本からきた学生が座っていた。彼はシュトラースブルクで法学、特に国法を勉強しており、法学博士試験を受けることになっていた。法学博士試験を正しく心配しながら、彼は、もし試験に受からなければ、日本に帰ってから恥のためにハラキリ、つまり割腹をしなければならぬといった。私の甥が面白がって、日本では試験を落とさせた教授も同じことをしないといけないんだよねと付け加えた。近くに座っていた新聞記者がこの会話を聞いていたのだが、正しく理解せずに、新聞の一日のニュース欄に、私のところで試験に落ちた学生が私に「日本式決闘」を要求し、私がそれを受けたという風に書いた。私のことを知っているシュトラースブルクの新聞はそうした情報を記事にすることもなかったが、この情報は大き目の、おそらくフランス系の新聞に入り、そこから拡散された。その結果、大半は私の全く知らない人から大量の手紙を受け取り、それらの手紙は私にそんなことはやめろと迫るものであった。最も切羽詰まって私に警告されたのは外国のご婦人方であったが、きっと彼女らは私の自殺的計画を読んで初めて私の名前を知ったのだろう。その後、問題の日本人は博士試験に見事に落第したが、腹を切ることもなく、私の講義に定期的に出席していたという証明書を私から授与され、日本の郵便行政にポストを得た。彼は〔その後も〕しばしば私に手紙をよこし、試験に合格することもなく日本ではどうも博士を名乗っていたようである。私はまたも、新聞で読むこと全てを信じてはならないという経験をしたのであった。

9. 皇帝家の結婚式

アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・プロイセン公子〔August Wilhelm von Preußen, 1887-1949〕のシュトラースブルクでの学業と法学博士号取得には固有の事情があった。公子は高級行政勤務に就くべきことになっており、ボンで法学を学んでいた。ボンからかれはグリュックスブルクの親戚を訪問しに行き、そこで気品のある従姉妹〔Alexandra Viktoria von Schleswig-Holstein-Sonderburg-Glücksburg, 1887-1957〕と知り合った。彼は彼女にほれ込み、婚約の約束をした。彼が父の許可を求めたとき、公女の方に他の計画もあって、皇帝は大層気を悪くしたらしい。皇帝は公子に対して、とはいえ君は学生であって、学生のうちは結婚できないし、結婚を考える前に最低限博

士号はとらないといけない、と言ったそうである。そういうわけで、博士試験に合格することが、公子の第一の、熱心に努力すべき目標であった。ボンでの講義は彼の気に入らず、別の大学で学業を継続しようとした。長い考慮のすえ、シュトラースブルクが選択された。後の職業を顧慮して、公子は特に国法を学ぶ必要があった。そこで彼は私の国法講義を聴き、更に私のもとで復習のための個人講義を受け、私が出した課題に関する論文を仕上げ、国法学に関する博士論文を書いた〔Die Entwicklung der Kommissariats-Behoerden in Brandenburg-Preussen bis zum Regierungs-Antritt Friedrich Wilhelms I. Inaugural-Dissertation der Hohen Rechts- und Staatswissenschaftlichen Fakultät der Kaiser-Wilhelms-Universitaet Strassburg zur Erlangung der staatswissenschaftlichen Doktor-Wuerde, 1908〕。非常に有能なフォン・マッケンゼンが学友として割り当てられ、学業指導と個人授業のためグラーフ・ツォー・ドーナ教授〔Alexander Graf zu Dohna, 1876-1944〕が割り当てられていた。公子は非常に精力的であり、簡単に理解し、休暇すら学業のために使い、19[08]年7月末に試験を最優等で合格し、両法博士号を授与されたのである。

今や父皇帝に課された条件は満たされ、公子の結婚式が行われうようになった。シュトラースブルク大学学長と私は結婚式に招待された。私にとってのこの栄誉の最初の結果として、私は極めて迅速に、非常にお金のかかる、ふんだんに金を編み込んだ真正枢密顧問官正装を仕立てなければならなかった。この正装はその後殆ど着る機会がなく、せいぜい皇帝誕生日の公式の祝賀ディナーで着たくらいであった。結婚式は極めて豪華に祝われた。ドイツ君侯統治家門、プロイセン在住の陪臣化された侯家・伯家、高位聖職者、大学その他高等学校関係者、外交官、省庁関係者、そして特に多くの軍部関係者が出席していた。個人は群衆に溶け込んでいた。結婚式は華麗なイタリアを範にとったルネサンス様式の宮殿礼拝堂で行われた。部屋とその調度照明の輝きと、高価な古風なレースで飾られ、宝石や真珠で輝きを放つ豪華な化粧室は見事だった。結婚式の間、その他の機会にはお目にかかれぬこの絢爛さを観察し、感嘆する機会をもてた。参列者はディナーのために別々の部屋に通された。私の席は騎士画廊（確かブルグンド画廊ともいったはずである）にあった。隣になったのは古い友人のライデン〔Ernst von Leyden, 1832-1910?〕と銀行総裁ハーフェンシュタイン〔Rudolf Havenstein, 1857-1923〕

であった。ディナーのあとはいわゆる行列レセプションが白の広間で行われた。全参加者が位階と身分に従って並べられ、新婚夫婦を先頭に、2・3人ごとの列になって順番に皇帝家全員、廷臣、婦人が陣取る高座の前を通りすぎるのである。皇帝夫妻の前を通るときはお辞儀をするのだが、その機会に皇帝は私に好意的に目配せされ、皇妃は私にお気づきになった。レセプションが終わるとダンスが始まった。ダンスが少しだけ続いたあと、松明ダンスが始まる合図が出された。これは大臣と宮廷官職者のポロネーズで、各踊り手がワックスかシュテアリンの燃え盛る松明を手に持ち、両陛下の前を通るときにお辞儀をするというものである。これは美しいというよりも奇妙であった。その後すぐに皇帝が宮廷全員とともに白の広間を後にし、お祝いは終わった。

その前の晩、私はオペラハウスの祝賀公演に招待された。観客席はどの階もバラの花綱飾りで飾られており、全く魅力的な光景を与えるものであった。結婚式の招待客が観客で、〔5幕構成の長編オペラ〕『ユグノー』の最初の2幕が上演された。

結婚式の翌日は何人かの男衆とともに新婚夫婦とハインリヒ・フォン・プロイセン公子妃〔Irene von Hessen-Darmstadt〕に歓待を受けた。私は美しく面白い思い出をシュトラースブルクに持ち帰った。

10. 或る襲撃

開戦以来、シュトラースブルク市は航空機の攻撃からの保護のため軍事指令によって街灯が消されていた。月明りがなければ町は深い闇に包まれた。1915年夏のある晩のこと、私はゴルデンリング夫人のところに彼女の姉妹のラカー夫人とお邪魔し、真夜中頃にラカー夫人をそこからそれほど離れていないルプレヒツアウ通り沿いのお宅に連れて帰っていた。このお宅に着くかというとき、突然私の隣を歩いていたラカー夫人が大きな悲鳴をあげるのを聞いた。転倒して足を折ったか大きな怪我をしたのだろうかと思い、助け起こそうと彼女の方に向き直った。彼女は地面に倒れ、彼女のうえに一人の男がいた。この男はすぐさま彼女から飛びのき、私の方に向かってきて私を庭園の壁に押し付け、私の傘を折り、両の拳で私の顔を殴打し始めた。暗がりのなかではあったが、刺客が軍服、それも灰緑色ではなく古い青の軍服を着用しているのが分かった。ラカー夫人の叫びを聞いて保安警察官が近づき、

もっていた笛で応援を呼ぶと、兵士はとてつもない俊敏さで私から飛びのき、暗闇に消えていった。しかし私は意識がはっきりしていたので、頭から帽子を奪い、駆けつけてきた保安警察官に引き渡した。その帽子から、兵士が〔シュトラースブルク近郊〕ケールの補充工兵大隊所属だということが確認され、その後すぐにそれが誰かということが明らかになった。殆ど怪我していなかったラカー夫人は保安警察官に連れられて数歩の距離の住居に戻り、その後に私も付き添われて帰宅した。自宅では左目から血が出ていて、その周りも血まみれなのに気付いた。一時間ほど新鮮な水で冷やし、それからベッドに入って数時間眠った。翌朝医者を呼んでもらい、左目の結膜に流血している傷口があることが確認された。視力は損なわれておらず、傷は驚くべき速さで快癒し、数日後には早くも包帯を外し外出できた。この数日の間、友人たちが思いやりある助力をしてくれたことには大変感謝している。

襲撃の後の日、襲撃者の両親が大いに悲痛な様子で私のところに息子の非を謝罪しにきた。更に上官がやってきて、彼の勤務上の指導に基づいて最良の証言を行い、彼の夜の犯罪は理解できないと述べた。最後に、外出許可違反の咎での3日の拘禁をくらった後、襲撃者自身がやってきた。彼は泣き出し、事件についても、そもそも問題の夜に自分が何をしていたか、全く記憶がないのだと主張したのである。彼がいうには、その晩、何人かの友人と苺大盛りケーキと一緒に食べたが10時にはシュトラースブルクに持っている住居に帰ったのだというのである。その後何があったかはそれ以上知らないというのだ。彼の言っていることが完全な真実であるか甚だ疑わしく思ったが、とはいえ気の毒に感じた。私は彼の暴力沙汰を赦していたし、彼が重い刑罰に苦しむことは望むところではなかった。兵営裁判所の事情聴取の際、私はありのままに事件を語り、しかし彼が酒を飲んでいたかという問題については2つの理由で否定した。一つは彼が諍いを始めたわけでも何かしら喚いていたわけでもなく、寧ろ事件が声も立てずに行われたからであり、もう一つは彼は千鳥足になっておらず、保安警察官が接近すると素早く逃走したからである。彼には犯行動機はなく、私の名前も全く知らなかったから、精神病であるか、犯行時に一時的に精神錯乱と意識障害にあったのではないかと推測した。その結果、彼はシュトラースブルクの精神病院に観察のため移送され、数週間後、その院長であるヴォレンベルク教授と大隊付医官は一致して、彼は問題の夜に意識障害において行為したのだという所見を示した。そ

れに基づいて犯人は訴追から解放され、刑事手続は取り消された。

ラカー教授夫人には怪我は無く、数日後には元気を取り戻された。

11. イタリアのこと

a) イタリアへの最初の旅行ではまず〔ロンバルディアの〕コモに逗留した。ディナーのあと、私はいくつかもってきていてイタリアでは手に入らないハヴァナ産のいい葉巻に火をつけた。まだ明るく早い時間だったから、街を散歩し、すぐに見ようと思っていた大聖堂に着いた。しかし葉巻に火をつけたまま教会に入るわけにはいかない。そこで、多分戻ってきた頃にはもうないだろうなと思いながら、玄関の柱の裏に隠しておいた。教会から出てくると葉巻はなくなっていたが、玄関前の階段から、教会前の広場にほかに小僧どもを大勢引き連れた小人が人目につく仕方葉巻をふかしながら教会の扉を観察しているが見えた。我が私に気づき、私が彼を見ていることを認識すると、逃げていくのではなく寧ろ私の方によってきて、愛らしいジェスチャーで葉巻を渡してきてこういった。「旦那、火が消えないようにしておきましたぜ」。彼はこの評価し難いサービスのためにチップを期待していたようだが、葉巻をそのまま吸わせてやると満足していた。

b) ガルダ湖畔のサローで、ある晩、夕食後に旅行仲間といっしょにカフェで座っていると、カフェの前で演奏しようとしていた「アーティスト協会」のチャリチャリ音が聞こえてきた。その演目の一つでも私の興味をわかせなかったならば、話題にするに値しなかったであろう。道に絨毯が敷かれ、そのうえで卵がものすごく離れているわけでない距離でチェス盤のように並べられ、15歳くらいの少女が短いカラフルな服を着て卵を踏まないように卵の間を踊った。人々はこの寵児を熱心に見た。私は他のところでは一度も卵踊りを見たことがない——自分がそもそも何をしたいのかも分からなくなっている議会人の演説を除いては。

義弟と一緒に別の旅行ではノヴァラで長めの滞在をした。その滞在は駅で夕食をするのに使ったのであるが。イタリアの硬貨が欲しかったから、私は支払いとしてボーイに100リラ以上の紙幣を渡すと、それをもって彼はまづいなくなった。ジェノヴァ行の列車が出発する数分前にボーイが戻ってきて、非常に急いでお釣りを机のうえで数えた。それを詳しく検証する時間はもはやなかった。私が受け取ったお金をジェノヴァのホテルで支払いに使う

うとすると、窓口の婦人がいくつかのリラを偽造だといって差し戻し、私がお金はノヴァラの駅で受け取ったんだという、それに対して机の大きな抽斗を開けて見せた。その抽斗はそれまで旅行者を騙してきた偽造通貨でほとんど一杯になっていたのであった。

c) ボローニャではもちろん、図書館、中世の壮麗で興味深い大学建物を訪れた。ピシッと服を着た若い男が私はそこら中ガイドし、かなりの専門的知識で以て見るべきものを示し、かつ説明してくれた。彼は学問的訓練を受けた官吏か図書館の実習生らしかった。立ち去る際、こうした地位にある男にチップを申し出るのは如何なものかと心配になった。そんなことをしたら彼を侮辱することになるかもしれない。他方、端金も渡さずに行ってしまうと彼が私をケチだと思われることも恐れた。そこで、〔一般に〕イタリア人はチップを喜んで受け取るだろうが、彼は受け取るべき身分ではないと考えれば断るだろう、しかし私は彼を普通のボーイのように扱うことはできず、もっと多くの額を申し出なければならないだろう、と考えたのである。それ故、私は彼に幾分おすおすと5リラ紙幣をあげると、彼は恭しく笑って受け取った。私はこの出来事を同時期にボローニャにいたシュトッベ〔Otto Stobbe〕に語ると、彼は数日前に図書館にいて守衛に1リラ渡したが全く満足していたのだと語った。

d) ボローニャで局留めの手紙を取りに郵便局に行ったとき、営業時間中だったのだが関連事務室その他は閉まっていた。その理由は次のようなものであった。この午前中に大きな葬式があり、郵便吏員は職場から離れ葬式を見に行ってしまったのだ。

サンタ・マルゲリータはもっと酷かった。そこでは局留めの手紙は整理されずに大きくて深い籠に投げ入れられていて、手紙を問い合わせにきた者は籠を渡されて、自分で自分宛の手紙を探し出さなければならなかったのである。

弟がミラノで、これから自分宛に来る手紙はミュンヘンに転送してくれと指示していた。しかし弟宛の手紙はそれ以上こず、私宛の手紙がミュンヘンに転送された。

e) 私が一度ローマの豪華なサン・パウロ教会にいたとき、同時にインドのラジャが侍従とともにこの教会にいた。彼は老婆から施しをせがまれ、豪華な衣装のポケットからお金を取り出し、それを乞食女のために侍従に渡し

た。侍従はその一部を自分のためにとってしまい、その残りを新たにやってきた教会用務員に渡した。教会用務員はそれを自分のポケットに隠し、乞食女を教会から追い出した。

f) イタリアで外国人が晒されている小さな詐欺によって私は良い機嫌を台無しにされたことはない。しかし酷く打撃を与えられたのは、私がヴァチカンで彫刻コレクションを見ていた時、ローマの高級ホテルの一つであるアルベルゴ・クリリナーレの私の部屋から、私の新品のコートとイエーナのツァイス製の高い双眼鏡が盗まれたことである。法律上補償義務のある亭主は全く無効な口実と反論によって何らかの賠償を支払うことを拒み、私は彼との訴訟にかかわりあう時間も、そのつもりもなかった。しかし窃盗を警察には届出たのだが、数日後に官吏が調書を取りにホテルに現れた。彼は盗まれた双眼鏡について詳しい情報を要求し、私がイエーナのツァイス製だというと、彼はジェノヴァの〜と修正し、私が何度も繰り返してイエーナのツァイスだと言っても、私がジェノヴァだと言っているということに固執した。その数日後、警部がきて、私に盗まれた双眼鏡をもって来たという知らせとともに呼び出された。実際、警部は勝ち誇った様子でオペラグラスを持ってきた。しかしそれは全くみすぼらしい、ぼろぼろの、全く使い物にならないオペラグラスで、全く無価値なものだった。思うに、警察はそうした事例のためにかれらの明敏さか善意かの証拠としてそれを備蓄してあったのだろう。

双眼鏡と同じく、コートも取り戻せなかった。イースターの週でひどく寒く、風も出ていたのだが、祝日のために新しいコートを調達できなかった。かなり探して漸く服屋でコートを見つけ、間に合わせで着ることができたが、サイズがきつく、かつ見栄えがよくなかった。仕立て直してもらおうとシュトラースブルクの行きつけのテーラーにもっていくと、それは無理だといわれ、同時に、もしこのコートをシュトラースブルクで着るのであれば、貴方のためにはもう仕事をしませんよ、そんなことをしたら私の名声が傷つきますからね、と言われたのである。私はこのコートを私の守衛に贈った。

g) ローマでは各省庁が一つ〔豪華な〕馬車をもっていて、大臣または場合によっては次官がその差配をすることができるという制度がある。1905年のイースターにローマにいたとき、同じ分野の同僚であるルイージ・ロッシ〔Luigi Rossi, 1867-1941〕、ボローニャ大学教授、が文部省次官であって、省の馬車の差配権限をもっていた。彼は馬車を私に使わせてくれ、毎日3時

に馬車が私をホテル・クィリナーレで拾いドライブに連れ出してくれた。私に同行してくれたのはベルリンから来た長年の友人であるツェジク教授夫人〔Pauline Zajíc; Florián Zajíc, 1853-1926 の妻〕と彼女の娘であった。御者は利口な人間でローマ周辺を正確に知っていて、ローマ周辺の名所に非常に自尊心をもっていた。我々はカンパーニャを通してフラスカーティや七教会まであらゆる方向に乗っていった。御者はそれで我々が全てを見て、あとは古い水道の余り大したことの無い遺構だけであった。こうして我々は他の外国人には知られていないものを沢山見た。私は帰路、ホテルに帰る前にペーター教会〔サン・ピエトロ大聖堂〕に乗っていき、夕陽が花窓から差し込むときの極めて綺麗な色鮮やかな光景を味わうのを常とした。ロッシに別れを告げ、馬車の件でお礼をいうと、彼は御者が私の大変な敬虔さに驚いていたと語った。私は毎晩祈りを捧げるためにペーター教会に乗っていったのだそうである。

h) ローマの非常に著名な法律家が申しわせて私のために祝賀食事を催してくれた。それは有名なコルソ通り沿いのカフェ・ディ・ローマ〔Caffe del Corso か?〕で行われ、非常にエレガントであった。私は非常に親切に歓待され、多くのテーブルトークで表敬された。参加者のなかには世界大戦中イタリア政府に属した人が何人もいた。名前を挙げれば、サランドラ〔Antonio Salandra, 1853-1931〕、オルランド〔Vittorio Emanuele Orlando, 1860-1952〕、シャローヤ〔Vittorio Scialoja, 1856-1933〕、ラヴァ〔Luigi Rava, 1860-1938 か?〕である。彼らはドイツとドイツの学問を高く評価しており、ドイツ人をコサックや〔アフリカ系の〕有色イギリス人によって文明化されるべき蛮族だとは未だ考えていなかった。まったく時代は変わってしまった。

12. ロシアのこと

露日戦争が終わったあと、ヘルドルフ〔ヘルフェルトの誤りか?〕氏の訴えに基づき、ベルリンのメンデルスゾーン銀行のロシア国家の預金が300万マルク差し押さえられた。そこでロシア政府が国際法および国法上、ドイツの民事裁判権に服すかという問題が持ち上がり、私はロシア国事顧問官ドゥノウキー〔Pjotr Nikolajewitsch Durnowo か?〕を通じてロシア政府のための鑑定意見書を依頼された。〔原稿終わり〕

[Bl. 47/S. 1]

1. Eine Haussuchung.

An einem Nachmittag im Winter 1863 um 3 Uhr klopfte es an meine Tür und hereintrat mit etwas stürmischer Eile, als wollte er mich unerwartet überraschen, mein damaliger Kollege Oncken [Wilhelm Oncken, 1838-1905]. Ich war in der Tat durch seinen Besuch zu so ungewohnter Stunde überrascht und begierig zu erfahren, was ihn dazu veranlasse. Er setzte sich zu mir und begann ein ganz harmloses Gespräch; besichtigte aber mit der Sorgfalt eines Detektivs die gesamte Einrichtung meines Zimmers, Möbel, Bilder, Wandschmuck u. s. w., was mir sehr auffiel. Er brachte das Gespräch auf meine Wohnung und frug mich, wie viele Zimmer ich habe. Als ich ihm sagte, daß ich außer dem Wohn- u. Arbeitszimmer, in welchem wir uns befanden, ein daranstoßendes Schlafzimmer habe, bat er mich, ihm dasselbe zu zeigen. Ich erfüllte ihm diesen, mich sehr befremdenden Wunsch und er besichtigte nicht nur sehr eingehend die Einrichtung und Ausstellung des Zimmers, sondern öffnete auch mit einem plötzlichen Ruck den Kleiderschrank, revidierte die darin befindlichen Anzüge und legte mir ernsthaft die Frage vor, ob ich kein anderes Zimmer mehr habe. Als ich ihn nun über dieses sehr eigentümliche Benehmen um Aufklärung bat, erzählte er mir lachend: Bei dem Balle, der vor wenigen Tagen bei Häussers [Ludwig Häusser, 1818-1867] stattgefunden hat, sei ich, während ich mich eifrig mit Frau Häusser unterhielt, von der alten tauben oder mindestens sehr schwerhörigen „Tante Paniel“ gefragt worden, ob es meiner Frau wieder besser gehe, und ich hätte dies bejaht. Wahrscheinlich hätte ich die Frage oder Tante Paniel meine Antwort mißverstanden. Auf dem Balle habe sich aber sofort die interessante Neuigkeit verbreitet, daß ich heimlich verheiratet sei; ich habe selbst von meiner Frau gesprochen u. erklärt, daß es ihr besser gehe. Unter den jungen Mädchen habe sich in Folge dessen eine ungeheure Entrüstung gegen mich verbreitet und ich sollte gänzlich vervehmt werden; doch sollte ich vorerst der Tat überführt werden. Die hübsche und liebenswürdige Schwester Onckens übernahm diese Aufgabe und sie nebst ihren Freundinnen ließen Oncken keine Ruhe, bis er sich entschloß, durch Augenschein festzustellen, was an dem Gerücht Wahres sei.

Beim nächsten Ball engagierte ich Fräulein Oncken zu Tisch und die Geschichte bildete den Gegenstand eines fröhlichen Gesprächs.

[Bl. 47r/S. 2]

2. Zwei gute Lehren.

Als ich nach Königsberg berufen worden war, machte ich dem Unterstaatssekretär im Kultusministerium den üblichen Besuch. Im Laufe der Unterhaltung sagte er zu mir: Königsberg ist keine billige Stadt. Sie werden mit Ihrem geringen Gehalt keine großen Sprünge machen können, aber es gibt dort viele reiche Kaufmannstöchter und ein so junger hoffnungsreicher Professor wie Sie kann sich daher leicht gut versorgen. Ich dankte bestens für diesen vortrefflichen Rat und bemerkte, daß ich mich in Königsberg sofort nach dem Einkommensteuerbetrüger erkundigen werde. Der Unterstaatssekretär merkte den Spott und brach etwas unwillig das Gespräch ab.

Als mir in Königsberg bald nach meiner Ankunft der Pedell das vierteljährliche Gehalt brachte, sagte er mit einer nicht mißzuverstehenden Absicht; Eins sage ich Ihnen, Herr Professor, hier in Königsberg macht sich niemand für Sie einen Fingernaß – ohne Trinkgeld.

3. Schwester Toggenburg

In Königsberg wohnte ich in der ersten Zeit am Steindamm in einer Parterrewohnung; mir gegenüber wohnte im ersten Stock ein Offizier, aus dessen Wohnung man in mein Arbeitszimmer u. zwar direkt auf meinen Arbeitstisch blicken konnte. Der Offizier hatte zwei reizende Kinder, einen Knaben und ein Mädchen, mit denen ich mich nach meiner Art und Gewohnheit bald befreundete; ich frug sie ab, was sie in der Schule gelernt haben, gab ihnen Rätsel auf, erzählte ihnen Geschichte, schenkte ihnen manchmal eine Näscheri oder ein kleines Spielzeug. Natürlich merkte dies bald ihre Mutter, die immer mit einer Handarbeit beschäftigt, am Fenster saß und bald begannen wir uns zu grüßen, wenn wir uns auf der Straße begegneten oder sonst sahen. Sie war eine schlanke Dame, hatte dunkle Haare und Augen, ein sehr blasses Gesicht und einen sehr melancholischen, schmerzlichen Ausdruck. Eines Tages erhielt ich

von ihr folgenden Brief:

Geehrter Herr Professor! Ich richte an Sie eine Bitte, die Ihnen sonderbar erscheinen wird. Ich hoffe, daß Sie dieselbe nicht mißverstehen und mich weder verachten noch auslachen werden. Wenn mein Mann Abends im Offizierskasino Skat spielt und meine Kinder in den Betten liegen, macht es mir Freud, Sie bei der Arbeit an Ihrem Schreibtisch zu beobachten. Ich bitte Sie daher, wenn Sie Abends Licht machen, die Fensterläden nicht zu schließen. Ella v. N. ...

[Bl. 48/S. 3] Mir war diese Bitte sehr unangenehm und mein erstes Gefühl war, den Brief einfach zu ignorieren u. die Fensterläden nach wie vor zuzumachen. Dies schien mir aber doch gar zu unfreundlich; ich hielt es für nötig, an Frau v. N. zu schreiben und ihre Bitte höflich abzulehnen; als ich aber den Brief verfassen wollte, wußte ich nicht die rechte Form zu finden. Ich fühlte Mitleiden mit der unglücklichen Frau, die in ihrer Ehe sich so einsam u. verlassen fühlte, daß das bloße Betrachten der geistigen Arbeit eines Fremden ihr einen Trost gewährte. Auch schien mir der Inhalt der Bitte nicht so schlimm zu sein, als daß ich ihn nicht gewähren könnte. Ich ließ also die Fensterläden auf, obgleich es mir ein unbehagliches Gefühl war zu wissen, dauernd bei der Arbeit beobachtet zu werden. Da ich übrigens an sehr vielen Abenden eingeladen oder aus einem anderen Grunde, Konzerte, Theater, Zusammenkünfte u. dgl. nicht zu Hause war, so war mein Zimmer wol häufiger dunkel als beleuchtet.

Meine Schwäche und Nachgiebigkeit hatte aber eine weitere, sehr merkwürdige Folge. An einem kalten Winterabend in später Stunde kam ein Dienstmann zu mir mit der Meldung, daß eine Dame an meiner Haustür steht und mich bitten lasse herauszukommen, da sie mich dringend zu sprechen wünsche. Es war Frau v. N. Sie bat mich, Sie ein Stück zu begleiten und mir eine Unterredung zu gewähren. Ich vermutete, daß es sich um die Scheidung ihrer Ehe handle und sie einen juristischen Rat wegen ihrer Kinder von mir haben wolle, aber es kam schlimmer. Sie klagte über ihre tiefunglückliche Ehe, ihr Mann habe nur militärische Interessen und verbringe die Abende bis Mitternacht beim Kartenspiel im Kasino; es fehle ihr an jeder geistigen Gemein-

schaft mit ihm; er Sorge weder für ihre geselligen noch für ihre geistigen Bedürfnisse, sie sei lediglich seine Haushälterin u. könne dieses Leben nicht länger ertragen. Ich suchte sie zu trösten und ihr vorzustellen, daß viele Frauen das gleiche Los ertragen müßten; aber meine Worte waren natürlich in dem Wind gesprochen. Inzwischen waren wir bis vor das Thor gelangt, wo es dunkel und menschenleer war. Da plötzlich stürzte sie sich vor mir in dem tiefen Schnee, umfaßte meine Knie und flehte mich unter einem Strom von Thränen an, sie zu retten und mit ihr sie zu entführen [diese drei Worte sind mit Bleischrift geschrieben] fortzureisen [sic!]; ich solle mit ihr sogleich zum Bahnhof gehen u. wie wir waren – ohne alles Reisegepäck u. Reisegeld, mit dem Nachtzug fortfahren, wohin es auch sei. Es kostete große Mühe, sie von der völligen Unmöglichkeit der Ausführung dieses Planes zu überzeugen. Endlich gelangt es, sie soweit zu beruhigen, um mit ihr den Rückweg anzutreten und sie bis zur Tür ihres Hauses zu begleiten. Vom nächsten Abend an wurden meine Fensterläden wieder [Bl. 48r/S. 4] geschlossen und ich machte der Sache dadurch ein baldiges Ende, daß ich meine Wohnung kündigte und in eine entfernte Stadtgegend verzog, wo ich keine Wohnungen, sondern dem Börsengarten gegenüber hatte. Seit jenem Abend habe ich von Frau v. N. nichts mehr gehört.

Als ich ein Paar Jahre später Königsberg dauernd verließ und bereits in dem Schnellzuge saß, der mich für immer aus dieser lieben Stadt entführte, bemerkte ich auf dem Bahnsteige, eine schwarz gekleidete und tief verschleierte Dame, die an den Wagen entlang ging und die Reisende nusterte. Mir schoß der Gedanke durch den Kopf, daß es vielleicht Frau v. N. sein könne u. sie die Absicht habe, zu mir einzusteigen oder wenigstens von mir Abschied zu machen. Ich lehnte mich soweit zurück als möglich u. verbarg meinen Kopf hinter den Fenstervorhänge und blieb in der Tat bis zum Abgang des Zuges unemerkt. Übrigens weiß ich nicht, ob meine Vermutung oder Befürchtung begründet war oder nicht.

4. Beinahe ein großer Bühnenerfolg.

Der Geh. Kommerzienrat Simon in Königsberg forderte mich zu Pfingsten

1867 auf, an einer von ihm arrangierten Strandpartie von einigen Tagen teil zu nehmen. Ich nahm die Einladung mit Vergnügen an, zumal mir der Oststrand bei Kgsb. zum größten Teile noch unbekannt war. Zu den Teilnehmern an dem Ausfluge gehörte Frl. L., eine jugendliche, anmutige Opernsängerin, welche von Herrn Simon, der in dem Theatercomité die Hauptrolle spielte, sehr protegirt wurde. Die jugendliche Künstlerin, damals Anfängerin, wurde später, wenn ich recht unterrichtet bin, Primadonna am deutschen Theater in Amsterdam. Bei einer Mahlzeit während unserer kleinen Reise, als ich ihr Tischnachbar war, aß ich mit ihr ein sogen. Vielliebchen, das ich selbstverständlich verlieren wollte und verlor. Nach der Rückkehr nach Königsberg löste ich meine Schuld durch Sendung eines Blumenstraußes ein. Frl. L. hatte an diesem Tage die Hauptpartie in der zweiaktigen Oper „Das Nachtlager v. Granada“ zu singen und sämmtliche Teilnehmer der Strandpartie hatten ihr versprochen, zu dieser Vorstellung das Theater zu besuchen. Auch ich war in einem Sperrsitz anwesend. Im Zwischenakt kam Herr Simon zu mir und sagte, daß Frl. L. mich bitten lasse, zu ihr hinter die Bühne zu kommen; sie wolle mir für den Blumenstrauß danken. Ich lehnte ab, [Bl. 49/S. 5] ich sei noch niemals in irgend einem Theater hinter der Bühne gewesen, fände mich da nicht zurecht; Frl. L. könne mir ein ander Mal danken. Bald darauf kam aber Herr S. zurück und sagte, ich müßte durchaus auf die Bühne kommen; Frl. L. weigere sich weiter zu singen, wenn ich nicht komme; ich würde die größten Unannehmlichkeiten verursachen. Mit diesen und ähnlichen Flausen bestimmte er mich, ihm endlich nachzugeben u. er führte mich auf die Bühne, wo Frl. L. zwischen 2 Coulissen mich erwartete und freundlich begrüßte. Inzwischen war aber die Zwischenaktspause abgelaufen und ich hatte kaum einige Worte mit Frl. L. gewechselt als die Klingel ertönte. Um Gottes willen – rief sie – gehen Sie schnell fort; ich muß gleich auftreten. In der Verwirrung und unkundig des Ortes lief ich aber direkt auf die Bühne; der Vorhang begann sich bereits zu heben und ich wurde noch schnell hinter die Coulissen gezogen, so daß ich dem Publikum nur etwa bis zu den Knien sichtbar wurde. Eine Sekunde später und ich wäre dem Königsberger Publikum auf der Bühne erschienen und hätte ohne Zweifel einen Heiterkeitserfolg sonder gleichen

erzielt.

5. Eingesperrt u. freigelassen.

An einem Sonntag Nachmittag machte ich mit Herrn und Frau Professor Laqueur [Ludwig Laqueur, 1839-1909] einen Ausflug in das Renththal. Bevor wir in einen der Gasthäuser von Ortenberg das Abendessen nahmen, besuchten wir noch flüchtig das über dem Ort gelegene Schloß und dem dazu gehörigen dem Publikum zugänglichen Garten, um die Aussicht von dort bei der Abendbeleuchtung zu genießen. Wir hatten nicht sehr viel Zeit bis zum Abgang des letzten Zuges nach Straßburg und eilten zum Ausgang des Gartens, fanden das Tor aber zu unserem Schrecken verschlossen. Alles Rufen war vergeblich; das einzige bewohnte Zimmer des Schlosses, nämlich das des Kastellans; und die Häuser des kleinen Dorfes waren zu weit entfernt, als daß man uns hören konnte. Wir waren in der peinlichsten Lage. Von dem großen Spaziergang, der wir gemacht, hatten wir Hunger und Nichts zu essen; bei der sommerlichen Temperatur hatten wir uns mit wärmenden Tüchern u. dergl. nicht versehen und nach Sommeruntergang wurde es sehr Kühl; wir mußten uns darauf gefaßt machen, die ganze Nacht da oben zuzubringen und es war zweifelhaft, ob [Bl. 49r/S. 6] wir am nächsten Morgen so frühzeitig bemerkt werden würden, daß wir noch den Morgenzug erreichen und rechtzeitig zu unseren Vorlesungen nach Straßburg kommen würden. Ich sah das Abenteuer von der heiteren Seite an und zündete scherzend meine letzte Zigarre an; Frau Laqueur aber war sehr bekümmert, nicht zu ihren Kindern nach Hause kommen. Aber was war zu tun? In das Unvermeidliche muß man sich schicken, sagt ein sehr banales Sprüchwort. Wir gingen in ein Gartenhaus, in welchem ein Tisch und ein Paar Stühle standen. Auf dem Tisch lag ein gestricktes wollenes Tuch. Es sollte unsere Rettung sein. Nach kurzer Zeit erschien die Frau des Kastellans in dem Gartenhause, sprachlos vor Erstaunen uns darin zu finden. Sie hatte das wollene Tuch auf dem Tisch liegen lassen und holte es, weil sie noch einen Abendspaziergang machen wollte und befreite uns aus der Gefangenschaft.

6. Glück im Unglück.

Im Sommer eines der 70' Jahre machte ich mit meinem Kollegen Prof. Schmiedeberg [Oswald Schmiedeberg, 1838-1921] eine Reise nach Pontresina. An einem schönen sonnigen Tage nahmen wir einen Einspänner, um nach den Berninahäusern zu fahren; die Bernina-Eisenbahn war noch nicht gebaut. Wir waren noch nicht weit gefahren als wir den Abgeordneten Lasker einholten, der den Weg zu Fuß machte. Da in unseren Wagen noch der Platz beim Kutscher frei war, forderten wir ihn auf, mit uns zu fahren; er lehnte aber entschieden ab. Als der Weg anstieg, verließ der Kutscher, wie es gewöhnlich geschieht, seinen Sitz und ging neben oder vor dem Pferde her. Da plötzlich scheute das Pferd vor irgend einen auf dem Wege befindlichen Gegenstand oder vielleicht vor einem über den Weg laufenden Tier. Der Kutscher sprang hinzu und griff dem Pferde in die Zügel; das Pferd aber bäumte [sich] auf und sprang zur Seite, fiel vom Rande des Weges hinunter und riß den Wagen sowie den Kutscher mit sich. Der Sturz war nicht sehr hoch, aber immerhin sehr gefährlich. Auf dem Rasen unterhalb der Fahrstraße lagen große Felsblöcke zerstreut und wir hatten das beinahe fabelhafte Glück grade zwischen Felsblöcke auf dem Rasen zu stürzen. [Bl. 50/S. 7] Wir lagen unter der aufgeschlagenen Wagendecke wie unter einem Schirm, der Kutscher unter dem Pferde. Schmiedeberg war ganz unverletzt; ich hatte nur einige unbedeutende Hautabschürfungen. Wir krochen, so schnell als möglich, aus dem umgestürzten Wagen heraus und zogen den Kutscher aus seiner gefährlichen Lage unter dem Pferde hervor. Dann wanderten wir zu Fuß nach dem Gasthaus an der Berninastraße, reinigten Gesicht und Hände von den Spuren des Unfalls und stärkten uns mit einem guten Mittagessen u. einer Flasche Sassella. Hätte Lasker unser Anerbieten angenommen und einer von uns dreien hätte auf dem Kutscherbock gesessen, so wäre dieser aller Wahrscheinlichkeit nach mit dem Kopfe auf ein Felsstück gefallen und getötet oder schwer verletzt worden.

7. Eine Nacht im Sarge.

Ich machte als Privatdozent von Heidelberg aus eine Fußreise durch Nordty-

rol, allein und mit wenig Geld. An einem heißen und schwülen Tage wollte ich mit einem jungen Führer, der meine Tasche trug, nach einem Orte, dessen Namen mir nicht mehr erinnerlich ist, wandere. Gegen Abend zog ein Gewitter auf; es blitzte und donnerte in der Ferne und fing an zu regnen. Das Gewitter kam näher; der Regen wurde immer stärker; es goß wie aus Kannen; es blitzte aus donnerte unaufhörlich; die Nacht brach ein; sie war starkfinster, nur durch die zuckenden Lichtstreifen der Blitze erhellt. Ich war bis auf die Haut durchnäßt und totmüde und konnte kaum noch weiter gehen. Von dem Dorfe, nach welchem wir wollten, war nichts zu sehen, der holperige und durchweichte Weg schien endlos zu sein. Da tauchte endlich in der Ferne ein Licht auf und neue Hoffnung belebte mich, das Ziel der Wanderung zu erreichen. Das Haus, aus welchem uns das Licht erstrahlte, stand vereinzelt dem Wege. Ich frug, ob es noch weit bis X. sei und erhielt die vernichtende Antwort: Noch eine gute halbe Stunde. Ich wäre tatsächlich außer Stande gewesen, noch so weit zu gehen und frug, ob ich nicht die Nacht überbleiben könne. Dies wurde ziemlich barsch verneint; [Bl. 50r/S. 8] es sei kein Wirtshaus u. sie seien auf die Aufnahme von Fremden nicht eingerichtet. Auf mein wiederholtes Bitten und mit Rücksicht auf das tobende Unwetter, die Finsternis der Nacht und die Gefährlichkeit des Weges gaben sie aber nach und willigten ein, daß ich die Nacht überblieb; ich mußte aber vorlieb nehmen mit dem, was sie bieten können. Nachdem ich in die erleuchtete Stube eingetreten war, die Wirtsleute mich sahen und mit mir sprechen und sich überzeugten, daß ich kein Vagabund sei, wurde sie sehr freundlich; die Wirtin trocknete meine Kleider in der Küche, der Wirt bedeckte mich mit einem Lodenmantel und es wurde mir und meinem Führer ein Abendessen bereitet. Da ich mich vor der Nässe und dem Gewittersturm durchkältet fühlte, bat ich, mir einen Glühwein zu bereiten, Wirt und Wirtin erklärten aber, nicht zu wissen, was das sei. Als ich ihnen das Rezept dazu angegeben hatte, wurde er unter meiner Aufsicht bereitet; er fiel sehr gut aus, schmeckte auch dem Wirt u. der Wirtin und da ich versicherte, daß er sehr wohltätig für die Gesundheit sei, erklärte der Wirt, daß er zur Förderung seines körperlichen Wohlbefindens und zur Stärkung seiner Seele öfters ein Glas Glühwein genießen werde. Ich bat nun, mir die Schlafbette an-

zuweisen, da ich zu Bett gehen wolle. Ich wurde in den oberen Stock geführt und befand mich zu meinem Erstaunen in einem Magazin von Särgen, schwarzen und gelben, großen und kleinen, einfachen und verzierten; an den Wänden Cruzifix und Madonnen. Mein Wirt war Sargtischler. In einem der Särge war ein sehr sauberes Bett hergerichtet, in welchem ich in Folge der Ermüdung und des Glühweins die ganze Nacht hindurch ruhig und fest schlief. Ich weiß also aus Erfahrung, daß die Ruhe im Särge nicht schlimm ist und sehe ihr ohne Grauen entgegen.

[Bl. 57/S. 9]

8. Harakiri.

Eines Abends war ich bei der „Festkneipe“ einer Straßburger Burschenschaft in Gesellschaft eines meiner Neffen, der der Burschenschaft angehörte. Neben mir saß ein Student aus Japan, der in Straßburg die Rechte, namentlich Staatsrecht, studierte und das juristische Doctorexamen machen sollte. In berechtigter Angst vor demselben stellte er mir vor, daß, wenn er es nicht bestehe, er nach seiner Rückkehr nach Japan aus Scham Harakiri machen d. h. sich den Bauch aufschlitzen müsse. Scherzend fügte mein Neffe hinzu, daß in Japan wol auch der Professor, der ihn habe durchfallen lassen, das Gleiche tun müsse. Ein in der Nähe sitzender Zeitungsschreiber, der das Gespräch gehört, aber nicht recht verstanden hatte, berichtete an ein Zeitungsblättchen unter den Tagesneuigkeiten, daß ein Student, welcher bei mir im Examen nicht bestanden habe, mich zu einem „japanischen Duell“ gefordert und ich die Forderung angenommen habe. Die Straßburger Zeitungen, die mich kannten, nahmen von der Meldung keine Notiz; dagegen ging sie in irgend eine größere wahrscheinlich französische Zeitung und aus dieser wieder in andere über. In Folge dessen erhielt ich eine große Zahl von Briefen, meistens von mir ganz unbekannten Personen, in welchen ich bestürmt wurde, die Sache doch zu unterlassen. Am eindringlichsten warnten mich ausländische Damen, die meinen Namen wol zum ersten Male kennen lernten, als sie von meinem selbstmörderischen Vorhaben lasen. Inzwischen fiel der Japaner glänzend durch das Doctorexamen durch, schlitzte sich aber den Bauch nicht auf, sondern ließ sich

von mir eine Bescheinigung geben, daß er meine Vorlesungen regelmäßig gehört habe und erhielt eine Anstellung in der japanischen Postverwaltung. Er hat mir noch öfters geschrieben und sich in Japan vielleicht den Dokortitel beigelegt, auch ohne das Examen bestehen zu haben. Ich aber hatte wieder eine Erfahrung gemacht, daß man nicht Alles glauben darf, was man in der Zeitung liest.

[Bl. 57r/S. 10]

9. Eine Hochzeit im Kaiserhause.

Mit dem Studium des Prinzen August Wilhelm von Preußen in Straßburg und seiner Promotion zum Doctor juris hatte es eine eigene Bewand[t]nis. Der Prinz war zum höheren Verwaltungsdienst bestimmt und studierte in Bonn die Rechte. Von dort machte er eine Reise zum Besuch seiner Verwandten in Glücksburg, lernte dort seine anmutige Cousine kennen, verliebte sich in sie und verabedete mit ihr ihre Verlobung. Als er um die väterliche Genehmigung bat, soll der Kaiser sehr ungehalten gewesen sein, zumal schon andere Pläne hinsichtlich der Hand der Prinzessin bestanden hatten. Der Kaiser soll dem Prinzen gesagt haben, er sei doch erst ein Student, könne als solcher nicht heiraten und müsse zunächst mindestens den Dokortitel erwerben, bevor an eine Heirat zu denken sei. Das Bestehen des Doktorexamens war daher das nächste, eifrig angestrebte Ziel des Prinzen. Die Vorlesungen in Bonn hatten ihm sehr mißfallen und er wollte seine Studien an einer andern Universität fortsetzen. Nach langer Überlegung fiel die Wahl auf Straßburg. Mit Rücksicht auf seinen späteren Beruf sollte der Prinz besonders Staatsrecht studieren. Er hörte daher meine Vorlesungen darüber, hatte außerdem bei mir eine Privatvorlesung zur Repetition, machte schriftliche Ausarbeitungen über Aufgaben, die ich ihm stellte und verfaßte eine staatsrechtliche Dissertation. Als Studien-genosse war ihm der sehr befähigte Herr v. Mackensen [Hans-Georg von Mackensen] zugeordnet und zur Leitung seiner Studien und zum Privatunterricht Prof. Graf zu Dohna [Alexander Graf zu Dohna, 1876-1944]. Der Prinz war sehr fleißig, von leichter Auffassung und verwendete auch die Ferien zum Studium, so daß er Ende Juli 19[08] das Examen summa cum laude bestand

und zum doctor juris utriusque promoviert wu[r]de.

Jetzt war die von seinem Kaiserlichen [Bl. 52/S. 11] Vater gestellte Bedingung erfüllt und die Hochzeit des Prinzen konnte stattfinden. Der Rector der straßburger Universität und ich wurden zur Hochzeit eingeladen. Die nächste Folge, welche diese Auszeichnung für mich hatte, bestand darin, daß ich mir mit größter Beschleunigung die sehr kostspielige reich mit Gold gestickte Uniform der Wirkl. Geheimen Räte anfertigen lassen mußte, von der ich später fast niemals Gebrauch machen konnte, höchstens bei dem offiziellen Festdinner am Geburtstage des Kaisers. Die Hochzeit wurde mit außerordentlicher Pracht gefeiert. Es waren alle deutschen regierenden Fürstenhäuser, die in Preußen ansässigen standesherrlichen fürstlichen u. gräflichen Häuser, die hohe Geistlichkeit, die Universitäten u. andern Hochschulen, die Diplomatie, die Ministerien und besonders reichlich das Militär vertreten. Der einzelne verschwand in der Menge. Die Trauung fand in der schönen, im Styl der Renaissance nach italienischen Mustern gebauten Schloßkapelle statt. Blendend war der Glanz der Räume, ihrer Ausstellung und Beleuchtung und die Pracht der Toiletten, welche mit den kostbarsten alten Spitzen geziert waren und von Juwelen u. Perlen strahlten. Während des Trauungsaktes hatte man Gelegenheit, diese Pracht, welche man sonst nicht zu sehen bekommt, zu betrachten und zu bewundern. Für das Diner war die Gesellschaft in die verschiedenen Räume verteilt; ich hatte meinen Platz in der Rittergalerie (die, wie ich glaube, auch die burgundische heißt); meine Nachbarn waren mein alter Freund Leyden und der Bankpräsident Havenstein. Nach dem Diner fand die sogen. Defileecour in weißer Saale statt; d. h. die gesamte Gesellschaft, nach Rang und Stand geordnet, das Brautpaar an der Spitze, zog secundum ordinem in Reihen von 2 oder 3 Personen an einer Estrade vorüber, auf welcher die gesamte kaiserliche Familie, der Hofstaat und die Damen Platz genommen hatten. Beim Vorbeimarsch vor dem Kaiserpaar verbeugte man sich, bei welcher Gelegenheit der Kaiser mir freundlich zuwinkte und die Kaiserin auf mich aufmerksam machte. Nach Beendigung der Cour begann der Tanz. Nachdem derselbe eine kurze Zeit gedauert hatte, wurde ein Zeichen gegeben, daß der Fackeltanz beginne. [Bl. 52r/S. 12] Derselbe ist eine Polonaise der Minister und obersten

Hofchargen, bei welcher jeder Tänzer eine brennende Fackel von Wachs oder Stearin in der Hand hält und beim Vorbeigehen vor den Majestäten sich verbeugt. Er ist mehr merkwürdig als schön. Bald darauf verließ der Kaiser mit dem gesamten Hofe den weißen Saal und das Fest war zu Ende.

Am Abend zuvor war ich zu einer Festvorstellung im Opernhause eingeladen; der Zuschauerraum war in allen Rängen mit Rosenguirlanden verziert, was einen überaus reizenden Anblick gewährte. Die Hochzeitsgäste bildeten das Publikum. Gegeben wurden die beiden ersten Akte der Hugenotten.

Am Tage nach der Hochzeit wurde ich mit einigen anderen Herren von dem jungen Ehepaar und der Prinzessin Heinrich von Preußen empfangen. Ich nahm eine schöne und interessante Erinnerung nach Straßburg mit.

[Bl. 53/S. 13]

(77. F!) [Bleistift]

10. Ein Attentat.

Seit Ausbruch des Krieges war die Stadt Straßburg auf militärische Anordnung zum Schutz gegen Angriffe der Flieger ohne Straßenbeleuchtung. Wenn der Mond nicht leuchtete, lag die Stadt in tiefster Finsternis. Eines Abends im Sommer 1915 war ich bei Frau Goldenring mit ihrer Schwester Frau Laqueur und begleitete diese gegen Mitternacht in ihre nicht sehr entfernt, an der Ruprechtsauer Allee gelegene Wohnung. Als wir fast an derselben angelangt waren, hörte ich plötzlich Frau L., die neben mir gegangen war, laute Schreie und Hilferufe ausstoßen. In der Meinung, daß sie gefallen sei und einen Fuß gebrochen oder sich sonst schwer verletzt habe, wendete ich mich zu ihr um ihr Hilfe zu bringen. Sie lag am Boden und ein Mann auf ihr, der sofort von ihr aufsprang, sich gegen mich wendete, mich gegen die Gartenmauer drückte, meinen Regenschirm zerbrach und mit beiden Fäusten kräftig gegen mein Gesicht einzuschlagen begann. Ich erkannte trotz der Finsternis, daß der Attentäter eine Soldatenuniform trug und zwar nicht eine feldgraue, sondern eine alte blaue. Als in Folge des Schreiens der Frau L. ein Schutzmann sich näherte und mit seiner Pfeife andere herbei rief, sprang der Soldat mit größter Behändigkeit und Schnelligkeit von mir und verschwand in der Finsternis. Ich

hatte aber die Geistesgegenwart, da die Mütze vom Kopf zu reißen und sie dem herbeieilenden Schutzmann zu übergeben, durch welche zunächst festgestellt wurde, daß er beim Pionier-Ersatzbataillon in Kehl stand und sodann auch bald seine Persönlichkeit ermittelt wurde. In Begleitung des Schutzmannes wurde Frau L., die nicht verletzt worden war, zu ihrer nur wenige Schritte entfernten Wohnung gebracht und dann ich nach Hause geführt. Dort sah ich, daß das linke Auge blutete und die Umgebung desselben blutig war. Ich machte eine Stunde lang Umschläge mit frischem Wasser und legte mich dann zu Bett und schlief einige Stunden. Am andern Morgen ließ ich den Arzt rufen, welcher feststellte, daß ich in der Bindehaut des linken Auges eine blutende Wunde hatte. Das Sehvermögen war nicht beeinträchtigt und die Wunde heilte überraschend schnell und gut, so daß ich schon nach wenigen Tagen die Binde ablegen und ausgehen konnte. Mit Dank gedankte ich der teilnehmenden Hilfe, welche gute Freunde und Freundinnen mir in diesen Tagen gewährten.

[Bl. 53r/S. 14] Am Tage nach dem Überfall erschienen die Eltern des Attentäters in großer Betrübniß bei mir um ihren Sohn zu entschuldigen; dann kam sein Kommandeur, gab ihm wegen seiner dienstlichen Führung das beste Zeugnis und sagte, daß ihm seine nächtliche Tat unbegreiflich sei. Endlich kam der Attentäter selbst, nachdem er 3 Tage Arrest wegen Urlaubsüberschreitung abgesessen hatte. Er zerfloß in Thränen und beteuerte, gar keine Erinnerung an den Vorfall und überhaupt an das, was er in der betreffenden Nacht getrieben habe, zu besitzen. Er sei am Abend mit einigen Freunden bei einer Erdbeerbombe zusammengewesen, aber um 10 Uhr in seine Wohnung, die er in Straßburg habe, gegangen; was später geschehen, davon wisse er nichts mehr. Obgleich ich starke Zweifel hatte, ob alles, was er sagte, der vollen Wahrheit entsprach, so tat er mir doch leid; ich vergab ihm sein brutales Benehmen und ich wünschte nicht, daß er die schwere Strafe erleide, die ihm drohte. Bei der Vernehmung von dem Garnisongericht erzählte ich den Vorgang, wie er sich zugetragen hat, verneint aber die Frage, ob er betrunken gewesen sei, aus zwei Gründen; erstens weil er keinen Streit angefangen, keinen Lärm irgend welcher Art gemacht; der Vorgang vielmehr sich in laut-

loser Stille abgespielt hat, und zweitens weil er nicht taumelte oder turkelte, sondern bei der Annäherung der Schutzleute mit größter Schnelligkeit die Flucht ergriff. Da jedes Motiv für seine Tat fehlte, er kannte nicht einmal meinen Namen, so vermutete ich, daß er geisteskrank sei oder sich bei der Tat in einer zeitweisen Geistesverwirrung und Störung des Bewußtseins befunden habe. In Folge dessen wurde er der Nervenklinik in Straßburg zur Beobachtung überwiesen und nach einigen Wochen gaben der Direktor derselben, Prof. Wollenberg, und der Bataillonsarzt übereinstimmend das Gutachten ab, daß er in jener Nacht im Zustand gestörten Bewußtseins gehandelt habe. Daraufhin wurde der Täter außer Verfolgung gesetzt und das Strafverfahren gegen ihn aufgehoben.

Frau Prof. Laqueur war nicht beschädigt worden und befand sich nach einigen Tagen wieder ganz wohl.

[Bl. 54/S.15]

11. Italienisches

a) Bei meiner ersten Reise nach Italien blieb ich zunächst in Como. Nach dem Diner steckte ich eine der feinen Havannahzigarren an, von denen ich einige Stücke mitgenommen hatte und die in Italien nicht zu haben waren. Da es noch hell und frühzeitig war, machte ich einen Spaziergang durch die Stadt und kam bald an dem Dom, den ich gern besichtigen wollte. Mit der brennenden Zigarre wollte ich aber die Kirche nicht betreten; ich versteckte sie also hinter einer der Säulen am Portal, ahnend, daß ich sie wahrscheinlich nicht wieder finden werde. Als ich aus der Kirche heraustrat, war die Zigarre verschwunden, ich sah aber von dem Stufen des Portals, daß auf dem Platz vor der Kirche ein Knirps, gefolgt von einer Schaar anderer Buben, in ostensibler Weise die Zigarre rauchte und die Kirchentür beobachtete. Als er mich bemerkte und wahrnahm, daß ich ihn sah, lief er nicht fort, sondern kam auf mich zu, überreichte mir mit zierlicher Handbewegung die Zigarre und sagte: Signore. Ho sostenuto il fuoco. Er schien für diesen unschätzbaren Dienst einen Soldo zu erwarten, war aber zufrieden, als ich ihm die Zigarre zum Weiterrauchen überließ.

b) Als ich in Salò am Gardasee eines Abends nach dem Nachtessen mit Reisegefährten in einem Café saß, hörte ich das Geklimper einer „Künstlergesellschaft“, welche sich vor dem Café produzieren wollte. Dies wäre nicht der Rede wert, wenn nicht eine ihrer Vorstellungen mein Interesse sehr erregt hätte. Auf der Straße wurde ein Teppich ausgebreitet, auf demselben wurden Eier in nicht sehr großer Entfernung von einander wie die Felder eines Schachbretts aufgestellt und ein Mädchen von etwa 15 Jahren in einem kurzen, bundfarbigen Kleidchen führte zwischen den Eiern einen Tanz auf, ohne eines derselben mit dem Fuß zu berühren und umzustoßen. Man sah Mignon lebhaft und lebendig vor sich. Ich habe sonst niemals einen Eiertanz gesehen – außer in den Reden von Parlamentariern, die nicht recht wußten, was sie eigentlich wollen.

Bei einer andern Reise, die ich mit meinem Schwager machte, hatten wir in Novara einen längeren Aufenthalt, den wir im Bahnhof zum Abendessen benutzten. Um uns mit italienischer Münze zu versehen gab ich dem Kellner zur Bezahlung eine Note über 100 Lire, mit welcher er zunächst verschwand. Wenige Minuten vor Abgang des Zuges nach Genua kam er wieder u. zählte in großer Eile den Restbetrag auf den Tisch, den näher zu prüfen keine Zeit mehr war. Als ich das empfangene Geld im Hôtel in Genua zur Zahlung verwenden wollte, wies die Dame da der Kasse ein Paar Lirestücke als falsch zurück u. zog auf meine Bemerkung, daß ich die Geldstücke im Bahnhof v. Novara erhalten habe, eine große Schublade aus dem Tisch heraus, die fast ganz mit falschen Geldstücken gefüllt war, mit denen Reisende geprellt worden waren.

[Bl. 54r/S. 16]

c). In Bologna besuchte ich selbstverständlich die Bibliothek, das schöne und interessante Gebäude der Universität im Mittelalter. Ein gut gekleideter junger Herr führte mich herum und zeigte und erklärte mit großer Sachkenntnis, was beachtenswert war; er war offenbar ein wissenschaftlich gebildeter Beamter oder Volontär der Bibliothek. Als ich wegging[,] hatte ich Bedenken, einem Manne dieser Stellung ein Trinkgeld anzubieten; es könnte ihn beleidigen; andererseits fürchtete ich, daß er es von mir schäbig finden würde, wenn ich

ohne bona manu fortginge. Ich überlegte nun, daß ein Italianer gern ein Trinkgeld nimmt, daß er es ja ausschlagen könne, wenn er es seiner nicht würdig halte, es anzunehmen, daß ich ihn aber nicht wie einen gewöhnlichen Diener behandeln könne, sondern ihm einen größeren Betrag anbieten müsse. Ich gab ihm daher mit einiger Schüchternheit einen Fünflireschein, den er huldvoll lächelnd entgegennahm. Ich erzählte die Geschichte Stobbe, der gleichzeitig in Bologna war und er sagte, er sei tags zuvor in der Bibliothek gewesen und habe dem Custode eine Lira gegeben, mit der er vollkommen befriedigt gewesen war.

d) Ich ging in Bologna zur Post, um postlagernde Briefe zu holen, fand aber, obgleich es Amtszeit war, das betreffende Bureau und viele andere geschlossen. Der Grund war folgender: An diesem Vormittag fand ein großes Begräbnis statt und die Postbeamten waren aus ihren Amtszimmern fortgelaufen um das Begräbnis anzusehen,

Schlimmer war es noch in Sta Margherita [Santa Margherita Ligure]. Dort wurden alle postlagernden Briefe unsortiert in einen großen und tiefen Korb geworfen und wer nach einem Briefe frug erhielt den Korb, damit er sich selbst die an ihn gerichteten Briefe heraussuche.

Mein Bruder hatte in Mailand angeordnet, etwa an ihn adressierte noch ankommende Briefe ihm nach München nachzusenden; da aber keine für ihn bestimmten Briefe mehr kamen, wurde die an mich adressierten nach München gesendet.

e) Als ich einmal in der prachtvollen Kirche von San Paulo bei Rom war, war gleichzeitig ein indischer Rajah mit seinem Diener in derselben. Er wurde von einem alten Weibe angebettelt, nahm einige Geldstücke aus der Tasche seines Prachtgewandes u. gab sie seinem Diener für die Bettlerin; dieser behielt einen Teil des Geldes für sich und gab den Rest dem hinzukommenden Kirchendiener, welcher ihn in seine eigene Tasche steckte und das Bettelweib aus der Kirche hinaus wies.

[Bl. 55/S. 17]

f) Durch die vielen kleinen Prellereien, welchen die Fremden in Italien ausgesetzt sind, ließ ich mir die gute Laune niemals verderben; empfindlich betrof-

fen wurde ich aber dadurch, daß mir, während ich im Vatikan die Sammlung der Skulpturen betrachtete, aus meinem Zimmer im Albergo Quirinale, einen der vornehmsten Hôtels Roms, mein neuer Überzieher und ein kostbares Fernglas von Zeiss in Jena gestohlen wurde. Der Wirt, der gesetzlich zum Ersatz verpflichtet war, weigerte sich unter allerlei nichtigen Vorwänden und Bestreitungen irgend eine Entschädigung zu zahlen und ich hatte weder Zeit noch Lust, mich auf einen Prozeß mit ihm einzulassen. Ich zeigte aber den Diebstahl der Polizei an und nach einigen Tagen erschien ein Beamter im Hotel zur Aufnahme eines Protokolls. Er verlangte nähere Angaben über das entwendete Fernglas u. als ich sagte, daß es von Zeiss in Jena sei, verbesserte er dies in Genova und ließ sich durch meine öfters wiederholte bestimmte Angabe davon nicht abbringen, daß ich Genova meine. Einige Tage darauf wurde ich gerufen mit der Meldung, der Polizeikommissar sei gekommen und bringe mir das gestohlene Glas. In der Tat brachte der Kommissar mit triumphierender Miene ein Opernglas; aber es war ein ganz elendes, klapperiges, völlig unbrauchbares Glas, das gänzlich wertlos war. Ich glaube, daß die Polizei es für solche Fälle zum Beweise ihrer Findigkeit oder ihres guten Willens vorrätig hatte.

Ebenso wenig wie das Glas bekam ich meinen Überzieher zurück. Es war die Osterwoche, empfindlich kalt und windig, und ein neuer Überzieher wegen der Feiertage nicht zu beschaffen. Nach vielen Suchen fand ich endlich in einem Kleiderladen einen Überzieher, den ich zur Not tragen konnte, der aber sehr eng war und schlecht saß. Als ich ihn meinem Schneider in Straßburg gab, um ihn zurecht machen zu lassen, erklärte er dies für unmöglich, sagte aber zugleich, daß wenn ich den Überzieher in Straßburg tragen sollte, er nicht mehr für mich arbeiten würde, da ich dadurch seinen Ruf schädigen würde. Ich schenkte den Überzieher meinem Portier.

g) In Rom besteht die Einrichtung, daß jedes Ministerium eine Equipage hat, welche zur Verfügung des Ministers, eventuell des Unterstaatssekretärs steht. Als ich Ostern 1905 in Rom war, war mein Fachgenosse u. Kollege, Luigi Rossi, Prof. in Bologna, Unterstaatssekretär im Ministerium des Unterrichts und verfügte über die ministerielle Equipage. Er überließ sie mir zum Gebrauch [Bl.

55r/S. 18] und jeden Tag um 3 Uhr holte mich der Wagen am Hôtel Qurinal zur Spazierfahrt ab. Mich begleitete meine langjährige Freundin, Frau Prof. Zajic aus Berlin und ihre Tochter. Der Kutscher war ein gescheuter Mensch, der die Umgegend von Rom genau kannte und sehr eitel auf ihre Sehenswürdigkeiten war. Wir fuhren durch die Campagna nach allen Richtungen bis Frascati und Sette chiese, der Kutscher hielt dadurch, daß wir Alles sahen und war es auch nur ein unbedeutender Rest einer alten Wasserleitung. So haben wir Manches gesehen, was anderen Fremden unbekannt bleibt. Auf der Heimfahrt pflegte ich vor der Rückkehr in das Hôtel an die Peterskirche zu fahren, um den überaus schönen farbenprächtigen Anblick zu genießen, den sie bietet, wenn die Abendsonne durch die Rosette hinein schien. Als ich mich von Rossi verabschieden und ihm für den Wagen dankte, erzählte er mir, daß der Kutscher über meine große Frömmigkeit erstaunt gewesen sei ; ich sei allabendlich zum Gebet in die Peterskirche gefahren.

h) Die angesehensten Juristen Roms vereinigten sich, um mir ein Festmahl zu geben. Es fand in dem bekannten Café di Roma am Corso statt und war sehr elegant. Ich wurde sehr liebenswürdig empfangen und mit vielem Tischreden geehrt. Zu den Teilnehmern gehörten mehrere Personen, die während des Weltkrieges zur italienischen Regierung gehörten ; ich nenne Salandra, Orlando, Scialoja, Rava. Sie waren voll Ruhmens Deutschland und der deutschen Wissenschaft und wußten noch nichts davon, daß die deutschen Barbaren seien, die durch Kosacken und farbige Engländer zivilisiert werden sollen. Sic tempora mutantur.

[Bl. 56/S. 19]

12. Russisches. Nach dem russisch-japanischen Kriege wurde auf Klage des Herrn v. Helldorf das Guthaben des russischen Staates bei dem Bankhause Mendelssohn in Berlin in Höhe von 3 Millionen Mark mit Arrest belegt. Es erhob sich die Frage, ob die Russische Regierung nach Völkerrecht und Staatsrecht der deutschen Gerichtsbarkeit in Civilsachen unterworfen sei und ich wurde durch den russ. Staatsrat, Herrn von Dunowky um ein Gutachten f. die Russ. Regierung ersucht. [Das Manuskript endet hier.]

(70) Nicht eindeutig lesbar. Damit dürfte gemeint sein: Pjotr Nikolajewitsch Durnowo (1843/45?-1915).